平成26年度・27年度盛岡市内遺跡群

赤　袰　遺　跡

—第3次・第4次発掘調査報告書—

2018. 3

盛岡市教育委員会

平成26年度・27年度盛岡市内遺跡群

赤　袰　遺　跡

—第3次・第4次発掘調査報告書—

2018. 3

盛岡市教育委員会

序　　言

盛岡市は，北上盆地北部に位置し，北上川，雫石川，中津川の合流点に開かれた，岩手県の県庁所在地です。豊かな自然環境のもと，高次都市機能の集積する地方中核都市として，発展してまいりました。

市内には旧石器時代から江戸時代に至る786箇所の遺跡が存在します。国，県，市の指定史跡として保存活用が図られている遺跡もありますが，多くの埋蔵文化財は各種開発によって姿を変え，あるいは消滅することも少なくありません。

盛岡市では，文化財保護の立場から，国，県の補助を受け，市内の個人住宅等建築に伴う発掘調査を継続しており，その調査成果は，地域の歴史を知るうえで大変貴重な成果となっております。

本書は，平成26年度から27年度にかけて実施しました，盛岡市内遺跡群のなかの赤袰遺跡の発掘調査報告書であります。この遺跡は，平安時代後期の奥六郡に君臨した，安倍氏の土器生産遺跡として，調査当時から注目を集めておりました。市民はもとより，地域の歴史を紐解くための資料として，広くご活用いただけましたら幸いに存じます。

最後になりましたが，事業を進めるにあたりまして，多大な御指導と御助言を賜りました，文化庁文化財部記念物課，ならびに岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課に対し，深く感謝を申しあげますとともに，発掘調査に御理解と御協力をいただきました，地権者の皆様，地域の皆様に厚く御礼申しあげます。

平成30年3月

盛岡市教育委員会

教育長　千　葉　仁　一

例　　言

1　本書は平成 26 年度と平成 27 年度に，国，県の補助事業として実施した，盛岡市内遺跡群赤袋遺跡第 3 次，第 4 次発掘調査の報告書である。

2　本書は遺構，遺物の実測図などの資料提示を意図して作成し，編集執筆は室野秀文が担当し，菊地幸裕，津嶋知弘，神原雄一郎，花井正香，佐々木亮二，鈴木俊輝，今松佑太，及川栞里が協力した。

3　遺構の平面位置は，日本測地系を用い，平面直角座標第Ⅹ系を座標変換した調査座標で示した。

赤袋遺跡　調査座標原点　X－31,000.000 m　＝　RX±0.000 m

Y＋23,000.000 m　＝　RY±0.000 m

4　高さは標高値をそのまま用いた。

5　土層図は堆積のあり方を重視し，線の太さを使い分けている。土層註記は層位ごとに記したが，竪穴建物内の柱穴や炉などの細部については割愛している。なお，層相の観察にあたっては，（小山正忠，竹原秀雄編　1970『新版　標準土土色帖』農林水産省水産技術会議事務局，財団法人日本色彩研究所監修）によっている。

6　遺構の名称及び記号は次のとおりである。

遺構	記号	遺構	記号	遺構	記号
建物跡	RB	竪穴建物跡	RE	溝・堀	RG
柱列跡	RC	土坑	RD	その他	RZ

7　使用した地形図は国土交通省国土地理院発行の 5 万分の 1 地形図「盛岡」「日詰」を 10 万分の 1 に縮小編集して使用している。

8　発掘調査に伴う出土遺物及び諸記録は，盛岡市遺跡の学び館で保管している。

9　本調査成果の一部については，現地説明会資料や発掘調査成果報告会等で公開しているが，内容が異なる部分については，本書をもって訂正する。

10　調査の体制は次のとおりである。

事業の指導・助言　文化庁文化財部記念物課　岩手県教育委員会生涯学習文化財課

調査主体

盛岡市教育委員会　教育長　千　葉　仁　一

教育部長　豊　岡　勝　敏

教育次長　中　野　玲　子（～H28）　大　倉　真　澄（H29～）

歴史文化課

課長兼遺跡の学び館長　袖　上　寛（～H27）　杉　本　浩（H28～）

歴史文化課（事務局）

課長補佐　吉　田　宏　明（～H28）

福　田　淳　（H29～）

文化財主査　三　浦　陽　一

学芸主査　岡　　聰

遺跡の学び館

館長補佐　北　田　牧　子（～H28）

多　田　秀　明（H29～）

文化財副主幹　室　野　秀　文

文化財副主幹　菊　地　幸　裕

文化財主査	今　野　公　顕	文化財主査	神　原　雄　一　郎
主　任	寺　島　幸　子（～H28）	文化財主査	花　井　正　香
	吉　田　智　春（H29～）	文化財主査	佐　々　木　亮　二
主　事	菊　池　祥　宏	主　任	川　村　忠（H29～）
	泉　山　翔　太（H29～）	主　事	佐　藤　美　沙（～H28）
文化財調査員	鳥　取　邦　美	文化財主事	鈴　木　俊　輝
文化財調査員	千　葉　茉　耶	文化財調査員	日　野　杉　潤　子
文化財調査員	戸　澤　博　子	学芸調査員	樋　下　理　沙
学芸調査員	中　里　早　希（H29～）	文化財調査員	今　松　佑　太
事務嘱託	齊　藤　晃　大	文化財調査員	及　川　栞　里
		学芸調査員	鈴　木　由　香（～H27）
		学芸調査員	坂　本　志　野（H28～）

発掘調査及び報告書作成（五十音順敬称略）

阿部　真紀子　　阿部　正幸　　阿部　有子　　天沼　芳子　　伊藤　敬子　　長内　理恵

及川　亜矢子　　及川　京子　　川村　久美子　　熊谷　あさ子　　小松　愛子　　小茂田　実

佐々木　富士子　　佐藤　和子　　佐藤　公一　　佐藤　美智子　　佐野　光代　　谷藤　貴子

千葉　智子　　千葉　留里子　　西田　千佳　　袴田　英治　　樋口　泰子　　細田　幸美

村上　幸子　　村上　美香　　前田　和代　　成ヶ澤　千恵　　山田　聖子

地権者

福士　良市　　福士　チヨ

指導，助言

浅利　英克（金ケ崎町教育委員会）　　飯村　均（福島県文化振興事業団）

井上　雅孝（滝沢市教育委員会）　　宇部　則保（八戸市教育委員会）　　及川　真紀（奥州市教育委員会）

君島　武史（北上市埋蔵文化財センター）　　杉本　良（北上市立博物館）

高橋　麻衣子（金ケ崎町教育委員会）　　西野　修（矢巾町教育委員会）　　羽柴　直人（岩手県立博物館）

八重樫　忠郎（平泉町役場）　　八木　勝枝（岩手県立博物館）　　八木　光則（岩手大学）

調査協力

国立病院機構盛岡病院　株式会社タックエンジニアリング

11　平安時代の土器の分類は，酸化炎焼成の土器を土師器，還元炎焼成の土器を須恵器とした。須恵器は3点の破片のみ出土しており，他はすべて土師器である。本文中で特にことわりのない場合はすべて土師器である。なお本遺跡は土器生産遺跡であり，破片の全面や一部が灰色や青灰色の還元炎焼成となっていても，器形や制作技法の特徴が土師器に共通する場合は土師器として報告している。

目　次

序　言
例　言
目　次
Ⅰ　遺跡の環境……1
Ⅱ　調査経過……5
Ⅲ　調査成果……9
1　基本層序と遺構確認状況……9
2　遺構と遺物……10
Ⅳ　総　　括……59
1　遺構についての考察……59
2　遺物についての考察……60
3　まとめと課題……63
抄　録

図版目次

第1図版　遺跡周辺空中写真
第2図版　遺跡全景
第3図版　第4次調査区全景，RE01竪穴建物跡
第4図版　第3次調査区全景，RD02土器焼成土坑
第5図版　RD02土器焼成土坑
第6図版　RE01竪穴建物跡，RD20土器焼成土坑
第7図版　RD01竪穴建物跡，RE01竪穴建物2期
第8図版　RE01竪穴建物跡轆轤穴
第9図版　RE01竪穴建物跡轆轤穴
第10図版　RD16土坑
第11図版　調査風景
第12図版　RE01竪穴建物出土土器（床面，E層）
第13図版　RE01竪穴建物出土土器（轆轤穴，D層）
第14図版　RE01竪穴建物出土土器（床面）
第15図版　RE01竪穴建物出土土器（E層，B2層）
第16図版　RE01竪穴建物出土土器（土器溜り，B3層）
第17図版　RD02，RD13土坑出土土器
第18図版　RD13，RD18土坑出土土器
第19図版　土製品，石製品，石器，鉄製品

表目次

表１　赤袋遺跡発掘調査一覧……3

挿図目次

第１図　赤袋遺跡及び関連遺跡位置図……1
第２図　周辺遺跡位置図……3
第３図　赤袋遺跡全体図……6
第４図　発掘調査区及び調査グリッド配置図……7
第５図　調査区遺構全体図……8
第６図　RE01 竪穴建物跡（1）……10
第７図　RE01 竪穴建物跡，RD20 土器焼成土坑土層断面図（1）……11
第８図　RE01 竪穴建物跡，RD20 土器焼成土坑土層断面図（2），轍幅穴……13
第９図　RE01 竪穴建物跡（2），土器焼成土坑……15
第 10 図　RE01 竪穴建物跡（3），RD18 土坑……16
第 11 図　RE01 竪穴建物跡出土土器（1）……18
第 12 図　RE01 竪穴建物跡出土土器（2）……19
第 13 図　RE01 竪穴建物跡出土土器（3）……20
第 14 図　RE01 竪穴建物跡出土土器（4）……21
第 15 図　RE01 竪穴建物跡出土土器（5）……22
第 16 図　RE01 竪穴建物跡出土土器（6）……23
第 17 図　RE01 竪穴建物跡出土土器（7）……24
第 18 図　RE01 竪穴建物跡出土土器（8）……25
第 19 図　RE01 竪穴建物跡出土土器（9）……26
第 20 図　RE01 竪穴建物跡出土土器（10）……27
第 21 図　RE01 竪穴建物跡出土土器（11）……28
第 22 図　RE01 竪穴建物跡出土土器（12）……29
第 23 図　RE01 竪穴建物跡出土土器（13）……30
第 24 図　RE01 竪穴建物跡出土土器（14）……31
第 25 図　RE01 竪穴建物跡出土土器（15）……32
第 26 図　RE01 竪穴建物跡出土土器（16）……33
第 27 図　RE01 竪穴建物跡出土土器（17）……34
第 28 図　RE01 竪穴建物跡出土土器（18）……35
第 29 図　RE01 竪穴建物跡出土土器（19），土製品，石製品……36
第 30 図　RE01 竪穴建物跡，RD02 土器焼成土坑出土鉄製品と石器……37
第 31 図　RD02，RD13，RD14 土器焼成土坑……40
第 32 図　RD02 土坑出土土器（1）……41
第 33 図　RD02 土坑出土土器（2）……42

第 34 図　RD02 土坑出土土器（3）……43
第 35 図　RD02 土坑出土土器（4）……44
第 36 図　RD13，RD14 土坑出土土器……45
第 37 図　RD11, 12, 15, 16, 17 土坑……47
第 38 図　RD11, 12, 15, 16, 17 土坑土層断面図……48
第 39 図　掘立柱建物跡，柱列跡，柱穴群……51
第 40 図　RB01, 02, 03 掘立柱建物跡……52
第 41 図　RB04 掘立柱建物跡，RC01, 02 掘立柱列跡……53
第 42 図　柱穴群土層断面図……54
第 43 図　土坑（1）……55
第 44 図　土坑（2）……56
第 45 図　RG01, 02, 03 溝……57
第 46 図　RD16, 18 土坑及び遺構外出土遺物……58
第 47 図　厨川柵，嫗戸柵擬定地周辺……65

Ⅰ　遺跡の環境

1　遺跡の位置と地形

赤袋遺跡は盛岡市街地の北西部，盛岡市西青山一丁目地内に所在し，北西に聳える岩手山を噴出起源とする大石渡岩屑雪崩堆積物[注1]で形成された，滝沢台地西辺部に立地する。滝沢台地は赤袋遺跡から約 10 km 北北西の滝沢市滝沢の柳沢から，農林水産省岩手種畜牧場，滝沢牧野林，盛岡市のみたけ（観武），青山町を経て，盛岡市前九年一，二丁目に至る広大な台地である。標高は滝沢市滝沢の柳沢で 250 m～270 m，牧野林で 153 m，盛岡市青山町で 141 m，前九年一丁目の宿田遺跡で 136 m となっている。台地は北から南へ次第に高さを減じつつ拡がっており，台地の南西側から南側は雫石段丘堆積物による低い段丘面を介して，南の雫石川や西側の諸葛川の氾濫原へと移行している。一方，盛岡市前九年一丁目から安倍館町，上堂にかけては，滝沢台地東縁が北上川に面しており，そこは比高 10 m～25 m の急崖となっている。滝沢台地の縁辺部は大小の沢が鞘状枝状に刻んでおり，これによって舌状台地が連続する地形となり，そこには縄文時代から中近世にいたる数多くの遺跡が立地している。赤袋遺跡もこうした遺跡の一つで，現在国立病院機構盛岡病院（標高 142 m）のある青山一丁目から西側にやや下り，南西方向へ張り出した台地の南東側緩斜面に位置している。浅い沢地形を挟んで，西青山一丁目と二丁目の二つの台地にまたがっており，遺跡の標高は 135 m～140 m，南側の中堤町からは 2 m ほどの比高差があるも，明瞭な段差はなく，遺跡全体の地形はなだらかな起伏を成している。遺跡の西側 600 m に流れる諸葛川と遺跡との間は水田や住宅地が広がり，台地西縁には，諸葛川から分岐した用水堰の小諸葛川が流れている。この用水堰は南東約 1 km の大館町遺跡西側を流れ，南の稲荷町遺跡の南側で再び諸葛川に注いでいる。さ

第 1 図　赤袋遺跡，関連遺跡位置図（国土地理院 5 万分の 1 地形図「盛岡」「日詰」を縮小・加工した）

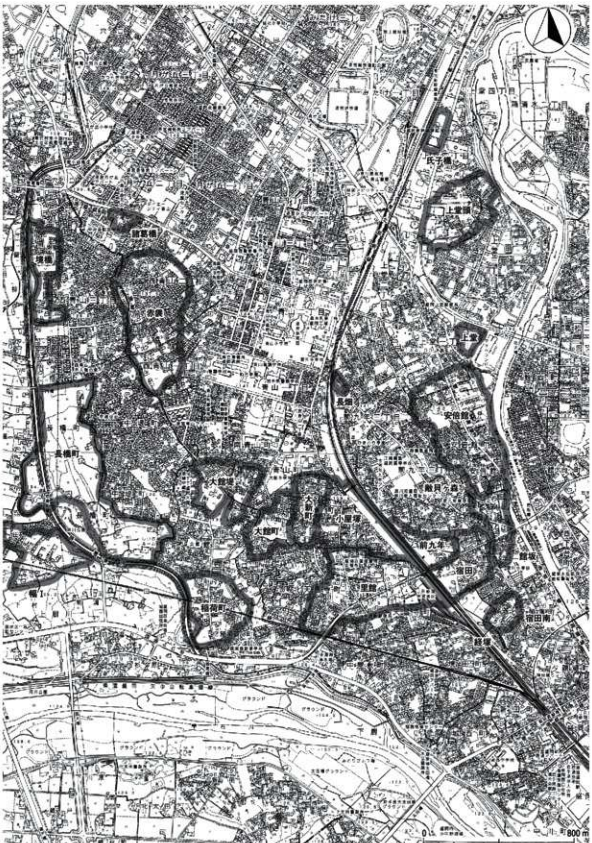
らに大館町遺跡から東に分岐した用水堰は，東に延伸されて天昌寺西側の堀を通じ，JR 東北新幹線盛岡駅東側の北上川へと注いでいる。

2　歴史的環境

滝沢台地上と，より低い平石段丘面には，旧石器時代から縄文時代，弥生時代，古代の集落跡，中世城館跡，近世集落跡が分布する。旧石器時代の遺跡は，滝沢台地南東端にある館坂遺跡で，洪民火山灰層中から石器が採集されているほか，縄文時代早期の土器も出土している。縄文時代草創期の遺跡は大新町遺跡と安倍館遺跡において爪形文土器が出土している。特に大新町遺跡では，縄文時代草創期から早期に至る濃密な遺物包含層が確認されており，早期の押型文土器や沈線文土器を出土する竪穴住居跡も複数確認されている。西隣の大館町遺跡は縄文時代中期を主体とする大規模な集落遺跡であるが，この遺跡からも縄文時代早期の遺物包含層が確認されている。ほかに前九年遺跡，宿田遺跡でも縄文時代早期から前期にいたる遺物包含層が確認されており。台地東縁の安倍館遺跡からも貝殻文土器や無文土器が出土している。前述の大館町遺跡では縄文時代中期の大規模な環状集落跡が存在し，平成 12 年（2000）11 月 24 日に岩手県史跡に指定され保存が図られた。この遺跡は大木 7a 式期から集落が形成されはじめ，大木 8a 式期から 8b 式期にかけて最盛期となり，大木 9 式期になると衰退することが明らかになっている。中期の集落はこのほかに，小屋塚遺跡，大新町遺跡，大館堤遺跡で確認されているが，集落の規模は大きくない。縄文時代後期になると明確な集落跡は確認されていないが，大新町遺跡で遺物包含層が形成されており，近傍に集落の存在が推定されている。縄文時代晩期については，大館町遺跡で遺物の散布が少量確認されている。弥生時代の遺跡は大館町遺跡の南辺で小さな石囲炉のある竪穴住居跡が 1 棟確認され，弥生時代前期の土器が出土している。

滝沢台地南端の宿田遺跡と少し南に離れた宿田南遺跡では，北海道系の後北 C2-D 式土器が出土している。また，安倍館遺跡外館からは，後北 C2-D 式土器と土師器小形甕が土坑から一緒に出土しているほか，近くから滑石製の有孔円盤形模造品が採集されている。古墳時代の集落について，域内ではまだ確認されていない。ただ宿田遺跡では，5 世紀ごろの土師器と黒曜石製ラウンドスクレイパーが出土したほか，7 世紀の古墳が 1 基確認され，主体部から鉄製の方頭太刀と小刀が出土した。この古墳の周辺からは 8 世紀を中心とする群集墳が確認されている。奈良時代になると大館町遺跡，大新町遺跡，小屋塚遺跡では集落が営まれ，集落は平安時代にも継続している。

平安時代の半ばの 10 世紀末から 11 世紀前半にかけて，安倍氏は陸奥鎮守府の在庁官人として台頭した。胆沢，江刺，和賀，稗貫，斯波，岩手の奥六郡は，実質的には安倍氏の統治下に置かれるようになっていた。その拠点は岩手郡厨川にも置かれ，安倍頼良（頼時）子息の安倍貞任は厨川次郎を名乗っていた。前九年合戦を記した陸奥話記には，厨川柵，嫗戸柵の二柵が登場し，古くから両柵は盛岡市厨川に存在したと考えられてきた。しかし，その遺跡について考古学的にはまだ明らかにされていない。この時代の市内の遺跡は大新町遺跡，大館町遺跡，小屋塚遺跡において，竪穴建物跡や土坑，掘立柱建物跡が確認されており，土師器の小皿や坏の破片，施磨き後内面黒色処理された高台付の坏が多く出土している。滝沢市の大釜館遺跡[注2]八幡館山遺跡[注3]では，土師器小皿のほか坏が大量に出土しており，大釜館遺跡では土師器坏，小皿のほか内面黒色処理の高台付坏も存在する。また，岩手町の沼崎遺跡[注4]からも大釜館遺跡と同様の土器群が確認されている。これらの遺跡は安倍氏の拠点，または関連施設と推定されるものであり，盛岡市内ではほかに諸葛川沿いの境橋遺跡，赤袋遺跡，稲荷町遺跡，北上川沿いの上堂頭遺跡や前九年二丁目の宿田遺跡。上田の高松神社裏遺跡などで，同じ内容の土器が出土している。滝沢台地上の遺跡は概ね台地縁辺部に分布していることがわかる。近年では 11 世紀の遺構遺物の集中と大館の字名から大館町，大新町，小屋塚遺跡付近に厨川柵を推定する意見[注5]。大館町遺跡から館坂・宿田南遺跡までの範囲のうち，宿田遺跡，館坂遺跡付近とする意見[注6]。さらには大館町，大新町，小屋塚遺跡付近を厨川



第２図　周辺遺跡分布図

欄とし，安倍館遺跡，館坂遺跡付近を塀戸欄とする意見[註13]がある。本遺跡を含め，これら擬定地や周辺遺跡解明の後に，安倍氏の拠点厨川欄，塀戸欄の実態が明確となるであろう。安倍氏の滅亡後，奥六郡を継承した清原氏は，厨川にも拠点があったと推定されるが，その遺跡は不明である。後三年合戦の後清原氏の遺領を受け継いだ藤原清衡は，江刺から平泉へと拠点を移し，奥羽二国を管掌した。平泉藤原氏の一族捆爪氏は斯波郡を本領としていたが，岩手郡もその影響下にあったらしく，北奥地域もその影響下にあったとする見解もある。稲荷町遺跡や里館遺跡[註7]では，堀を備えた居館や外郭施設が明らかになっており，このあたりに平泉藤原氏の拠点が存在した可能性が高い。

文治５年（1189）源頼朝は平泉藤原氏を滅ぼし，９月11日から18日まで厨川に滞在した。９月12日には甲斐の御家人工藤小次郎行光が岩手郡地頭を拝命し，胚酒宛飯を献じた[註8]。以後工藤氏は厨川を拠点に岩手郡を統治したが，岩手郡地頭職は鎌倉時代のある時期から北条氏へと移っていた。鎌倉時代の工藤氏の拠点が何処に存在したのかは明確ではないが，里館遺跡には13世紀から14世紀の遺物も散見される。雫石川の南岸の台太郎遺跡には，13世紀後半から14世紀前半の大形で不整長方形の居館が営まれる。また詳細な年代は不明ながら，宿田南経塚は中世の可能性がある礫石経塚である。こうした一連の遺跡は鎌倉時代以後の岩手郡を明らかにする上で重要な遺跡である。元弘３年（1333）鎌倉幕府が滅亡すると，岩手郡の多くは元弘没収地となったらしい。岩手郡仁王郷は現在の盛岡市中心市街地付近であるが，この地の三分の二の領有をめぐって南条清時と後藤基泰が争っていた[註9]。鎌倉時代の南条氏と後藤氏は共に北条氏の有力被官であったが，共にその後岩手郡に存続した形跡がない。室町時代の仁王には甲斐原氏を出自と伝える福士氏が入っている。一方厨川の工藤氏は，鎌倉時代に岩手郡地頭職を失った後も，厨川に存続したと伝えられる[註10, 11]。しかし元弘の乱以後の度重なる戦乱によって，次第に勢力を縮小し，わずかに厨川村のみの領有となっていた[註12]。鎌倉時代から斯波（紫波）郡は足利氏の領地であった。南北朝時代は斯波郡，稗貫郡ともに北朝勢力であり，斯波郡高水寺は足利氏の拠点であり続けた。室町時代の応仁，文明の乱以後，足利将軍家の権威は失墜したが，斯波郡高水寺の斯波氏は戦国時代までに岩手郡にも勢力を拡げている。天文14年（1545）には岩手郡滴石（雫石）と猪去に一族を配置し，雫石御所，猪去御所と称された。このころ厨川の工藤氏や不来方の福士氏も斯波氏に属していた可能性もある。糖部の南部氏がこの地方へ本格的に侵攻してくるのは天文年間（1532～1555）以後で，天正14年（1586）から天正16年（1588）７月にかけて南部信直が斯波詮直を攻略している。天正18年（1586）南部信直は秀吉から南部七郡本領安堵の朱印状を交付された。翌天正19年（1591）九戸政実の乱を豊臣秀吉の再仕置により平定し，軍監浅野長吉の助言によって不来方への移転を決意した。不来方は盛り上がり栄える岡の意味から盛岡と改称され，南部信直，利直は福岡城（旧九戸城）を居城としながら盛岡城を築城した。寛永10年（1633）南部重直の入城以来，明治の廃藩置県に至るまで盛岡城が盛岡南部氏の居城であり，城下は盛岡藩領の中心として栄えた。

註１　土井宜夫　2000年３月　（滝沢村文化財調査報告書第32集「岩手山の地質―火山灰が語る噴火史―」）滝沢村教育委員会
２　滝沢村教育委員会　2003年３月『大釜館遺跡発掘調査報告書―滝沢村区画整理事業遺跡発掘調査―』滝沢村教育委員会
３　室野秀文，井上雅孝，神原雄一郎　1995「八幡館山遺跡について」「岩手考古学」第７号　岩手考古学会
４　高橋昭治，八木光則　1994「岩手町沼崎遺跡出土の土器」「岩手考古学」第６号　岩手考古学会
５　羽柴直人　2011年３月　「東日本初期武家政権の考古学的研究―平泉勢力圏の位置づけを中心に―」総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻
６　盛岡市遺跡の学び館　2012　「第11回企画展　検証　厨川欄―古代末期のもりおか―」
７　盛岡市遺跡の学び館　2014　「里館遺跡第58次発掘調査報告書」工藤善蔵，盛岡市教育委員会
８　「吾妻鏡」文治５年（1189）９月12日の条
９　小笠原謙吉　1941　「第一章沿革編第五節中世史」「岩手郡誌」岩手県教育会岩手郡部会
10　田中喜多美　1951　「第四章吉野期」「盛岡市史第二分冊中世期」盛岡市
11　「奥南落穂集」
12　同
13　樋口知志　2016　「前九年合戦」「前九年・後三年合戦と兵の時代」吉川弘文館

Ⅱ　調査経過

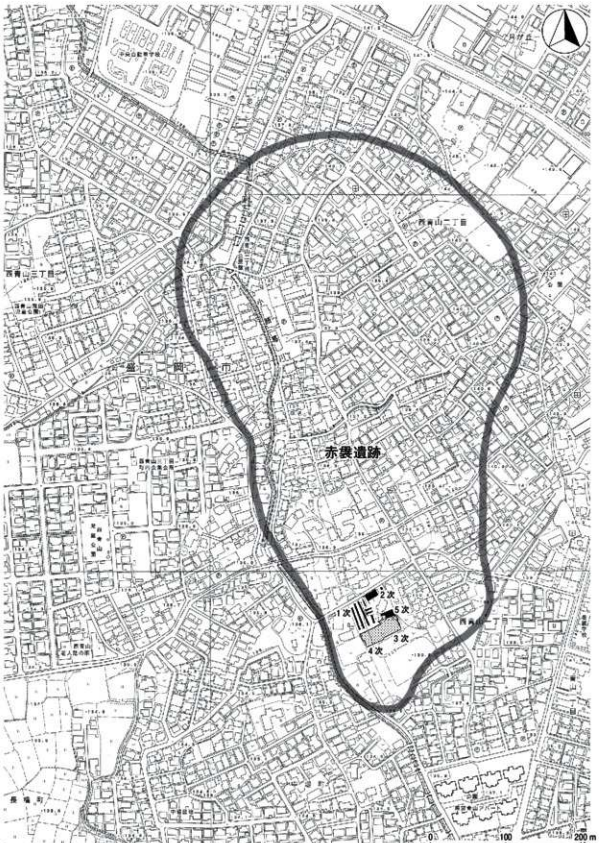
赤袈遺跡の発掘調査は平成12年度（2000）以後5回実施され，全て開発に伴う緊急発掘調査である。第1次調査は平成12年9月27日，宅地造成に先立ち実施した試掘調査で，調査地点は後述する第4次発掘調査の北西側である。縄文時代の陥し穴，平安時代の土坑と柱穴，近世掘立柱建物跡が確認された。調査結果により盛り土して遺構の保存を図ったうえで共同住宅を建築している。第2次調査は平成26年（2014）に第1次調査の北東側地点を宅地造成に先立ち試掘調査を実施したが，遺構，遺物ともに確認されなかった。この時，後に第3次，第4次調査区となる畑地に，平安時代後半の土器破片が疎密に散布していることが確認された。

平成26年5月13日，個人住宅及び農作業小屋を建築する目的で発掘届が提出された。同年10月14日～16日の試掘調査の結果，平安時代後半の土坑や古代以後の溝，柱穴などが確認され，平安時代後半の土器が大量に埋蔵されていることを確認した。遺構の分布範囲は開発予定地の全体に及んだため，地権者と協議の上，本発掘調査は平成26年度と平成27年度の2カ年にわたり実施することになった。平成26年度は敷地の北東側約半分について本調査を実施した。調査の結果縄文時代土坑2基，平安時代掘立柱建物跡4棟，土器焼成土坑1基，粘土採掘坑1基，平安時代以後の柱穴，溝2条，土坑3基があり，土器焼成窯からは多量の土器類が出土した。調査期間は10月14日から同年12月25日まで，調査面積は578 m²である。平成27年度は南西側の部分を発掘調査している。調査の結果平安時代竪穴建物跡1棟，土器窯2基，土坑3，粘土採掘坑4，柱穴1が調査された。第3次，第4次調査で出土した土器は，その特徴から平安時代後期の安倍氏に関連する土器生産遺跡として調査当時から注目された。調査期間中の平成26年12月10日，平成27年6月27日には発掘調査現地説明会を開催し，市民に調査成果を公開した。また平成27年7月11日の岩手考古学会（第47回研究大会）で調査速報を発表した。平成27年2月7日から5月17日と平成28年2月6日から同年5月15日には，盛岡市遺跡の学び館において埋蔵文化財調査資料展「盛岡を発掘する」を開催し，写真パネルと出土遺物を展示公開した。さらに同展示期間中の平成27年3月8日と平成28年3月6日には各年度の発掘調査成果を発表した。

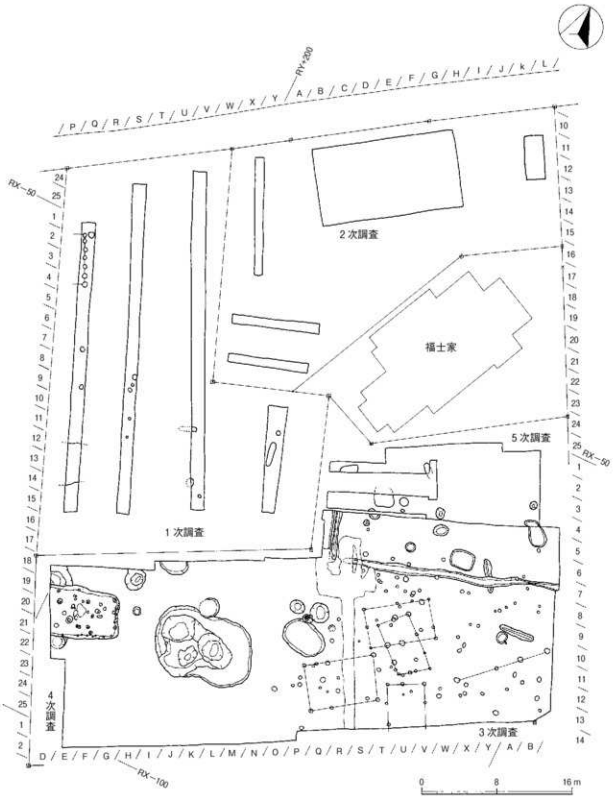
調査成果の整理作業及び報告書の作成作業は平成26年度の12月25日から開始し，平成29年度末まで作業を継続した。平成30年3月28日に本報告書を刊行した。

表1　赤袈遺跡発掘調査一覧

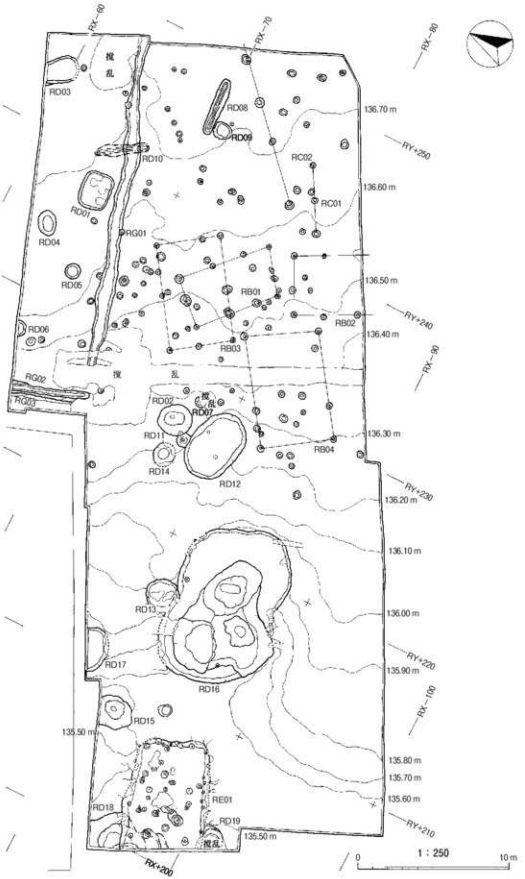
次	所在地	調査原因	調査期間	調査面積	調査成果	措置
1	西青山一丁目22番1	共同住宅	2000.9.27	173 m²	縄文土坑2，平安以後柱穴10，土坑1，近世掘立柱建物1	掘削制限工事実施
2	西青山一丁目23番地	宅地造成	2014.5.13～15	207 m²	遺構・遺物なし	工事実施
3	西青山一丁目21番，16番2	個人住宅	2014.10.14～2014.12.25	578 m²	縄文土坑2，平安掘立柱建物4，土器窯1，粘土採掘坑1，柱穴，近世土坑，溝	工事予定
4	西青山一丁目21番，16番2	個人住宅	2015.5.11～2015.6.30	510 m²	平安竪穴建物1，土器窯2，土坑3，粘土採掘坑4，柱穴	工事予定
5	西青山一丁目21番	個人住宅	2017.6.28	94.3 m²	時期不詳土坑3	工事予定



第３図　赤農遺跡全体図



第4図　発掘調査区及び調査グリッド配置図



第５図　調査区遺構全体図

Ⅲ　調査成果

1　基本層序と遺構確認状況

今回の調査地点は遺跡南東部にあたり，南東側へ緩やかに傾斜している。この場所は調査直前までは野菜畑であり，調査区の中央部から南西部にかけての地表面には，平安時代後期の土師器の破片が大量に散布していた。基本層序は地表からⅠa層（暗褐色ないし黒褐色の耕作土），Ⅱ層（黒色土ないし黒褐色土），Ⅲ層（褐色土ないし黄褐色土），Ⅳ層（黄灰色土）の順に堆積している。Ⅲ層以下の土層は地山で締りがあり硬い。大半の箇所では耕作土直下がⅢa層の上面にあたり，Ⅱ層は地形的低みや大きな土坑の上面に残存している。遺構検出面の標高は，調査区北東隅で136.7 m，調査区南西隅で135.5 m～135.6 mで，概ね平坦ではあるも南西側へ緩やかに傾斜している。調査区の中央部から南西部にかけては，長芋や牛蒡などの作付けによって深く攪乱されており，その深さは遺構埋土や床面，底面にまで及んでいた。このため表土除去を重機で行った後，人力での遺構確認作業で遺構と攪乱部分の範囲を確認。次に攪乱部分を隅々まで手作業で掘削してから遺構精査に入った。その結果，縄文時代の土坑3基，平安時代後期の竪穴建物跡1棟，掘立柱建物跡4棟，平安時代後期またはそれ以後の土坑17基（土取り穴を含む），近世以後の溝3条などが確認された。古代の土坑の中には土器焼成土坑3基と土取り土坑5基を含んでおり，調査地点は当該時期の土器生産遺跡であることが判明した。

2　遺構と遺物

RE01竪穴建物跡・RD20土器焼成土坑（第6図～第30図）

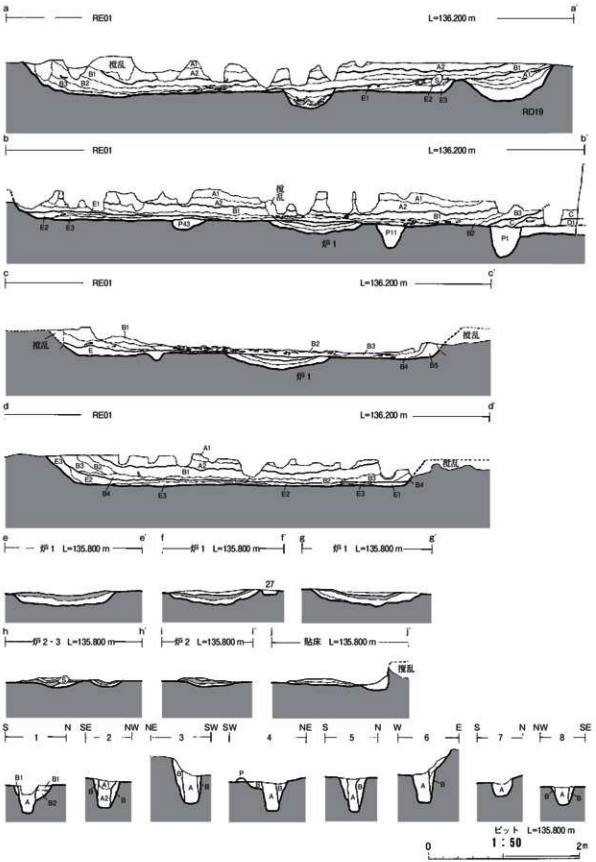
RE01竪穴建物の廃絶後に，竪穴部分を活用してRD20土器焼成土坑が形成されている。両遺構は規模やプランを踏襲した連続する遺構であることから，一括して記述し説明する。

プランと規模　調査区西端に確認された竪穴建物跡で，表土直下の暗褐色土Ⅲa層上面で確認された。竪穴の西壁は調査区外であるほか，全体に耕作による攪乱が著しい。竪穴の規模は確認部分で西南西から東北東に7.18 m，南南東から北北西に4.85 m～5.6 mを計る。竪穴の壁高は北壁が39 cm，東壁が18 cm，南壁が17 cm～21 cm残存し，竪穴床面は黄褐色土のⅢb層を掘り込んでいる。竪穴西壁は調査区外で未確認であるが，竪穴西部の埋土堆積状況から調査区西壁の至近と推定され，後述する炉1が竪穴の中央部とするならば，竪穴の全体規模は長軸8.1 m～8.27 m，短軸4.85 m～5.6 mであり，東壁側がやや狭い形の隅丸長方形プランとなる。主柱穴の配置はP1～P6で構成される2間×1間の配置で，東妻のP3とP6は竪穴の東壁に接している。竪穴の主軸方位はN112.5°Wを示す。竪穴南壁西寄りには，張り出しが存在するが，西側を大きく攪乱されており，張り出しの詳しい形状と規模は不明である。遺構の重複状況はRD18土坑の南側を本竪穴建物が切平し，RD19土坑の上面を本竪穴建物の張り出し部分が切平している。またこの竪穴建物は竪穴東側中央部から竪穴南半部を貼床（E層）しており，貼床の上面はスロープ状に南側張り出しの面へと連続している。このE層下の地山の床面を1期（第6図），E層上面の床面を2期（第7図）とする。貼床の範囲は炉1の南端部に及んでいる。この2期竪穴建物廃絶後の竪穴中央部には，大量の土器が集積され土器溜りが形成されて，周囲の壁際に焼土と炭化物が分布していた。これがRD20土器焼成土坑である（第9図）。焼土は竪穴の西側に多く形成されていた。RD20土器焼成土坑は竪穴の窪みをそのまま活用して，多くの土器を焼成したことが明らかになった（第6図～第9図）。

埋土と変遷　RE01竪穴建物跡とRD20土器焼成土坑は連続する遺構であるため埋土については一括して説明する。

A1層　黒色土主体（10YR2/1シルト質植物土に10YR3/2シルト質植物土が10%混合し粉状，密で硬い）

第6図　RE01竪穴建物跡（1）



第７図　RE01 竪穴建物跡，RD20 土器焼成土坑土層断面図（1）

A2 層　黒色土主体（10YR2/1 シルト質植壌土に 10YR3/1 植壌土 5%，10YR3/2 植壌土 5% 混合し粉～粒状，密で硬い）

B1 層　黒褐色土主体（10YR2/2 シルト質植壌土に 10YR4/3 シルト質壌土 3% 混合し，やや密でやや硬い）

B2 層　黒褐色土主体（10YR2/2 シルト質植壌土に 5YR4/4 焼土 5%，7.5YR3/3）シルト質壌土 5% 混合し粉～粒状，やや密でやや硬い）

B3 層　黒褐色土主体（10YR2/2 シルト質植壌土に 10YR4/3 シルト質壌土 5% 混入し粉状～粒状～粒状，やや密，やや硬い，炭化物含む）

B4 層　黒褐色土主体（10YR2/2 シルト質植壌土に 7.5YR4/4 焼土 3%，10YR4/3 シルト質壌土 3% 混合し粉～粒状，やや密，やや硬い，炭化物含む）

B5 層　黒褐色土主体（10YR2/2 シルト質植壌土に 10YR4/4 シルト質壌土 7% 混合し粉～粒状，やや密，やや硬い，炭化物含む）

C 層　黒褐色土主体（10YR2/2 シルト質植壌土に 5YR5/4 焼土 25% 混合し粉～粒状，やや密で硬く炭化物含む）

D1 層　黒褐色土主体（10YR2/2 シルト質植壌土に 5YR5/4 焼土 40% 混合し粉～粒状，やや密，やや硬い）

D2 層　黒褐色土主体（10YR2/2 シルト質植壌土に 7.5YR4/4 シルト質壌土 5% 混入し粉状，やや密，やや硬い）

E1 層　黒褐色土主体（10YR2/2 シルト質植壌土に 10YR4/2 粘土 10% 混合し粒状，やや密でやや硬い）

E2 層　黒褐色土主体（10YR2/2 シルト質植壌土に 10YR5/2 粘土 40%，7.5YR4/3 焼土 10% 混合し，粒～塊状，やや密でやや硬い）

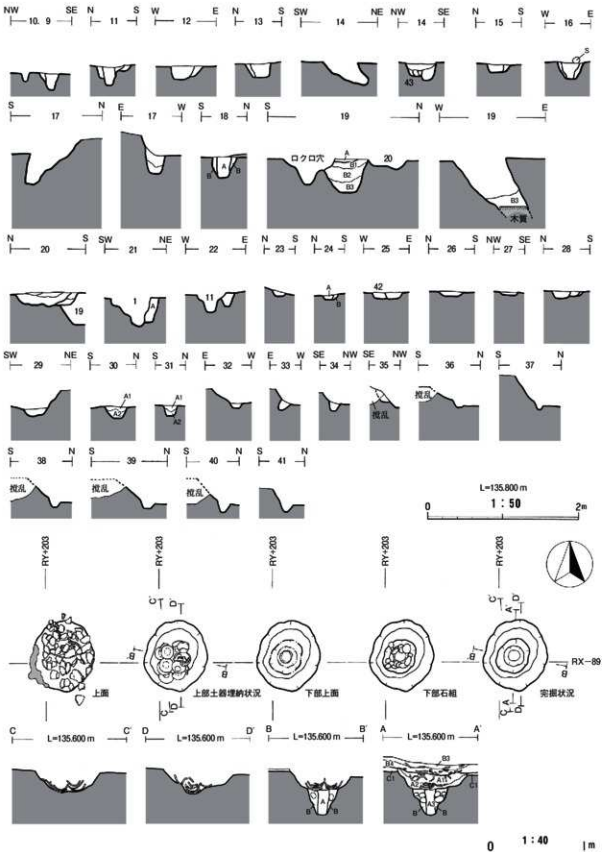
E3 層　黒褐色土主体（10YR2/2 シルト質植壌土に 10YR5/2 粘土 30% 混合し粒～塊状，やや密でやや硬い）

このうち A 層，B 層は自然堆積層であり，特に A1 層は遺構外の低みに残存する Ⅱ 層に近似する。また，C 層と D 層は竪穴西部の壁近くに堆積した土層で，熱の浸透による焼土化，あるいは焼土粒が多く含まれる土層である。遺構精査の初段階ではこの土層が竪穴の西壁になる可能性を考えて，西側に古い別遺構を想定しながら掘り下げていたが，明確な壁面の立ち上がりを確認できず，1 期と 2 期の変遷では竪穴プランの変更は認められなかった。E 層は 1 期の床面の上に盛られた灰白色粘土の粒や塊を多く含む貼床で，この上の面が 2 期の床面である。

1 期床面からの出土遺物は後述する。

柱穴　柱穴及び柱穴状の穴は 41 口確認されている。このうち主柱穴の No.4 柱穴は貼床（C 層）の掘り下げ途中から穴の形状が確認できたが，他の柱穴については地山の床面上にて確認した。このことから主柱穴は 2 期まで継続した可能性があるが，その他の柱穴ないし柱穴状の穴を 1 期と 2 期に峻別することは極めて困難である。また 1 期の北東隅には，E 層よりも下層に径 1.4 m の貼床が存在する。柱穴のうち主柱穴の P1～P6 は径 28 cm～40 cm，深さは 28 cm～35 cm あり，径 12 cm～18 cm の丸い柱痕跡が認められる。柱痕跡（A 層）は黒褐色土主体，掘形埋土（B 層）は黒褐色土と褐色土の混合土である。P14，P17，P19 は斜めに掘り込まれており，P19 の底には径 28 cm の丸柱の下部が残存しているが深い位置のため取り上げていない。P20 は炉 1 の一部と P19 を掘り込んでいるが，穴の形状から柱穴ではない。後述する轆轤穴は E1 層上面から掘り込まれており，2 期のものである。1 期の床面はほぼ平坦であるが，いわゆるタタキのような硬化面は認められない。また，No.23，29，33～41 柱穴が壁沿いに配置されているが比較的浅く，壁際の階溝は認められていない。

柱穴からの出土遺物は P8 の柱痕跡から第 30 図 603 の刀子破片，P22 の埋土から第 30 図 605 の鉄製紡錘車が出土している。1 期床面の遺物は第 11 図 6 の土師器坏，7～10 の土師器高台付坏，11～17 の土師器小皿，第 29 図 584～586 のミニチュア土器，第 30 図 601，602 の鉄製刀子が出土している。ミニチュア土器 3 点は回転糸切後内外ヘラミガキと体部下端をヘラケズリし，内外黒色処理されている。また床面からは第 30 図 611，612 の敲打痕，または敲打痕と摩擦



第 8 図　RE01 竪穴建物跡土層断面図（2），轆轤穴

痕のある石が出土している。

炉　炉は中央部の炉1のほか，北東部の炉2，炉3，東側中央の炉4，炉5がある。このうち炉1～3は床面を浅く掘り込み，内部に黒褐色土と黄褐色土の混合土を詰め，その上面に火熱浸透による焼土が形成されている。炉1は東西1 m，南北1.2 m，深さ13 cmの不整円形の掘り込みがあり，この南西部をP20に切られている。また貼床のE層に炉1南端の一部を覆われている。焼土は径92 cm，厚さ5 cm～8 cmの硬い赤褐色焼土の浸透が確認された。焼土の上にはにぶい黄橙色ないし黄灰色の灰に赤褐色の焼土粒が混入し堆積している。炉1の下部掘り込みの埋土からは第11図4，5の小皿破片が出土している。

炉2と炉3は，竪穴北東部隅のやや低くなった床面上に径1.3 m内外の黄褐色土の貼床があり，その上面からごく浅い皿状の掘り込みを行って土を詰めた上に明るい赤褐色の浸透焼土がある。炉2はP18の一部を覆い，P15に切られている。炉2，3ともに下部の掘りこみからの出土遺物はない。炉2の上面には黒褐色土と焼土の混合土が堆積している。

炉4と炉5は径20 cmほどの円形の焼土が連なるものである。床面表面のみ薄く焼土が形成されたもので，熱の浸透による焼土は深いところでも2 mm～3 mmである。

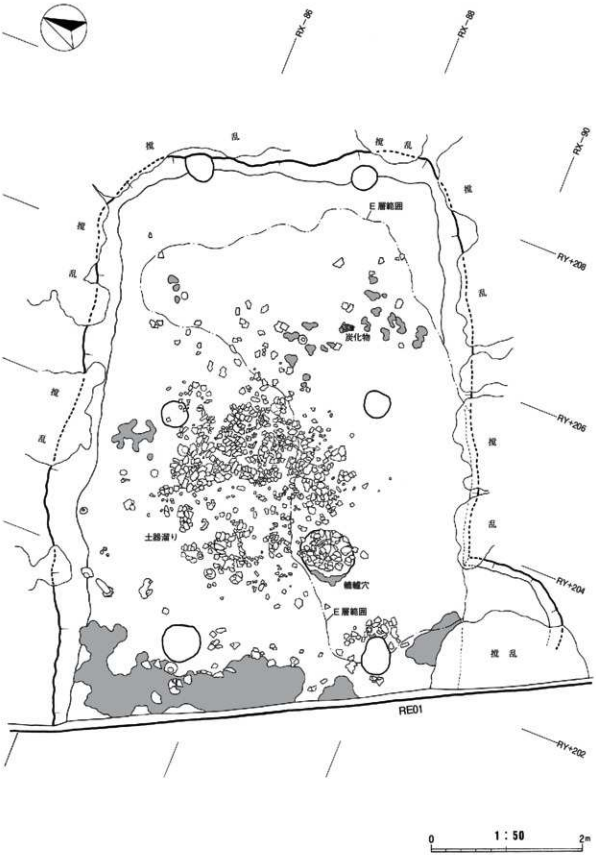
轆轤穴（第6図，第10図，第17図～19図）　炉1とP19南側に確認された轆轤を据え付けた痕跡で，轆轤そのものは残存していない。E1層上面より1期の床を掘り込み，P19とP20を切っている。穴の径は62 cm～72 cmの楕円形で，穴の深さはE1層の上面から50 cmである。穴の上面を竪穴埋土B4層が覆っている。穴の上面西側縁辺部には薄い焼土が確認された。穴は形状と埋土から上部と下部に大別される。穴の上部は鍋底状を呈し，62 cm～72 cmの楕円形で深さ20 cm～24 cmある。内部のA1層とA2層は黒色土と暗褐色土や褐色土，焼土の混合土で，第15図134～153の土師器坏は3個体ないし4個体程度正位で重ねたものを並べて埋納され，上をA1層，A2層で覆っていた。ほかにA2層からは第15図154の土師器高台付坏と155の土師器小皿が出土し，A1層からは第15図156～第17図189の土師器坏。第17図190～194の土師器高台付坏，第17図195～206の土師器小皿が出土している。土師器小皿には198～201，204～206などのように歪んだ形状のものが多く見られる。穴の下部は径33 cm～38 cmの楕円形で深さ28 cm，底部の径は11 cmないし12 cmで穴の形状は漏斗状である。A3層は轆轤の回転軸の痕跡で，径12 cmの円形の軸であり，黒色土主体の上に暗褐色土粒がわずかに混入する。B層は径4 cm～10 cm大の川原石または破砕した礫21個を軸と壁の間に充填し，礫や石の間に灰褐色ないし鈍い褐色の粘土で軸を固定している。石のほとんどは被熱して脆い。穴の下部からの出土遺物はない。

土器溜り　竪穴と土坑のほぼ中央部，炉1に重なる位置に径2.2 m，厚さは6 cm～8 cmに多数の土器が集積されている。その堆積は埋土B3層からB2層に及んでいる。周囲のE層上面からD層，C層にかけて焼土や炭化物が多く確認された。土器溜りは土器溜りB3層とB2層に分層して取り上げているが，これは埋没過程で土器片の隙間に B3層からB2層の順に土が流れ込んだもので，実際の土器溜りは一括で集積されたものと把握される。土器については後述する。

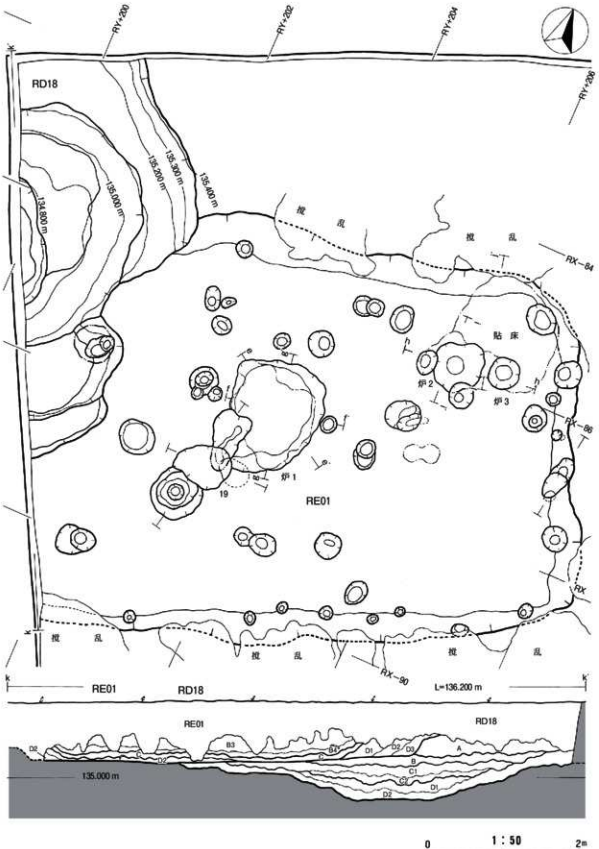
出土遺物

E層の内E2層からは第11図18～35，第12図36～53の土器，591の穿孔のある石製品が出土している。このうち第11図18～21は土師器ロクロ坏，22～33は土師器内面黒色処理の高台付坏，34と35は大型の坏または鉢と見られる底部高台，第12図36～47は土師器ロクロ小皿，48の土師器小型甕，49，50の土師器甕は輪積み整形で体部外面に粗いヘラケズリがある。51～53は須恵器大甕破片で，鈍い紫灰色に焼かれており，外面タタキで薄い自然釉がかかる。

E1層からは第12図54～第13図76の土師器ロクロ坏，77～88の内外または内面黒色処理の土師器高台付坏，89から第14図116のロクロ小皿，117の内外黒色処理の鉢，118の土師器甕が出土している。土師器甕は輪積み整形でロクロを用いていない。第14図119～133はE層中出土の土器で，119～121はロクロ坏，122はロクロの高台付坏で炭化物が付着するもの。123は内外ヘラミガキで黒色処理の高台付坏，124は内面黒色処理の高台付坏底部，124～132はロ



第 9 図　RE01 竪穴建物跡（2），RD20 土器焼成土坑



第10図　RE竪穴建物跡（3），RD18土坑

クロ小皿である。このほかE層からは第29図593の土製賽子。E2層から第30図600の鉄鏃，E1層からは604の鉄製刀子茎と608の鉄鏃茎，E層上面からは第30図610の棒状鉄製品が出土している。

D層とC層は炉1よりも西側の壁際に形成された，焼土や炭化物を多く含む埋土である。この土層は南東部の一部でE層を覆っているが，中央の土器溜りとは重複せず，C層上面は土器溜りの下面に連続する。

D層からは第17図207～209の土師器坏，同210～第18図219の土師器高台付坏，220～232の土師器小皿，233～237の土師器小形器台が出土している。このうち土師器高台付坏は211と215は内外ヘラミガキと黒色処理されており，外は内面ヘラミガキと黒色処理である。

C層からは第18図238～240の土師器坏，同241～第19図253の土師器高台付坏，254～263の土師器小皿，264の木葉痕のある土師器甕底部が出土している。土師器高台付坏のうち247は内外ヘラミガキと黒色処理であるが，他は内面ヘラミガキと黒色処理となっている。B5層とB4層からはごく少量の土師器破片が出土している。

土器溜りB3層からは265～270の土師器坏，271の内外ヘラミガキの土師器坏，272～277の土師器坏，278～280の土師器小皿が出土している。

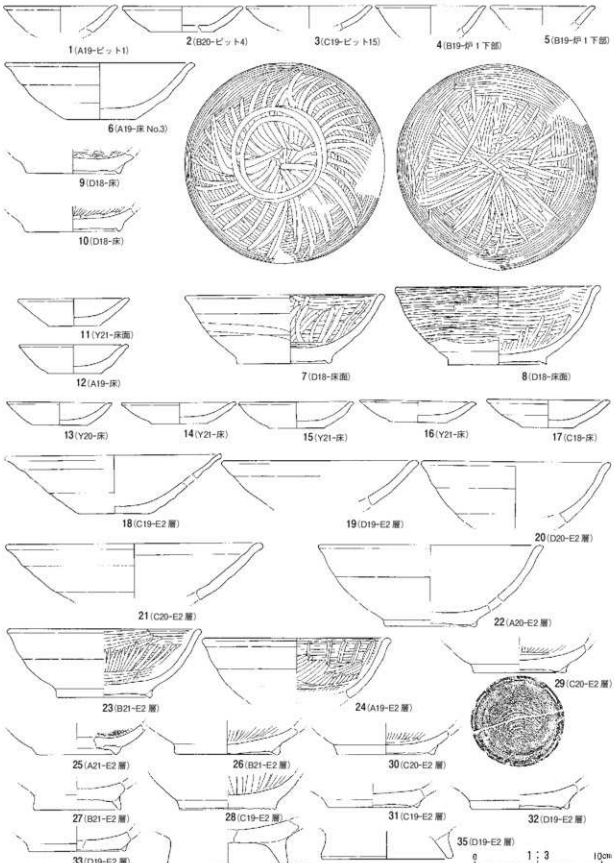
土器溜りB2層からは282～第21図327の土師器坏，328，329の土師器高台付坏，330～第22図362の土師器小皿が出土している。小皿のうち363～365は手捏ねの小皿であるが，364は口縁部が直立する器形で轆轤整形され，底部回転切り離し後に手捏ねで器面に凹凸を付け調整している。

B3層からは第22図366，375の土師器坏，376～379の内面黒色処理土師器坏，380の高台付坏，381～第24図395の内面または内外黒色処理の土師器高台付坏，396の大型の坏または鉢と見られる土師器高台付底部，399の小形器台，400～417の小皿が出土している。

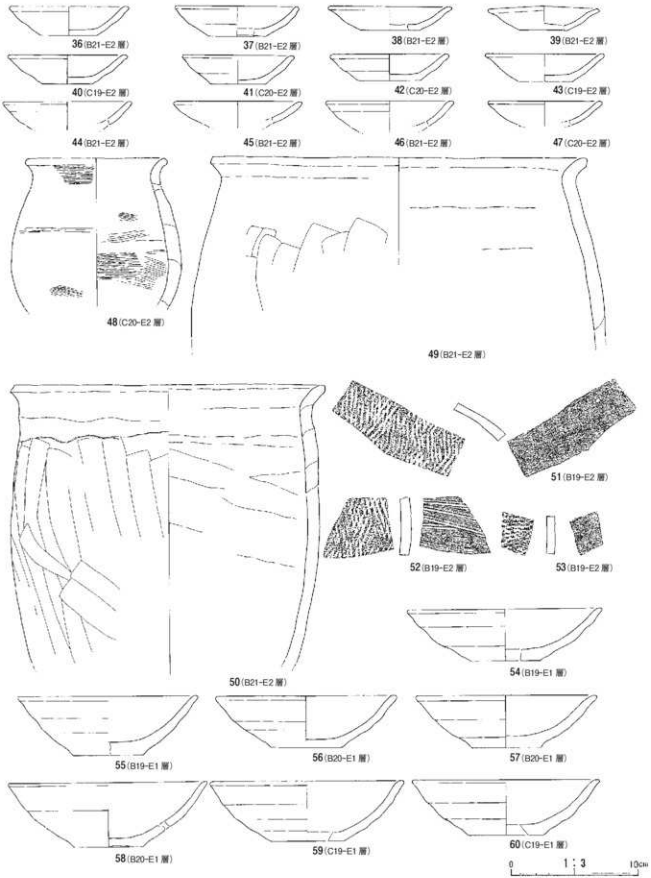
B2層からは第24図418～第25図452，第26図461～466，468～471の土師器坏，453～460の内面黒色処理の土師器坏，472～第27図486の内面または内外黒色処理の土師器高台付坏で，477の底部高台内には施による刻書がある。487～489の小形器台，490の小形土器，491～526の小皿，427の内外ヘラミガキ黒色処理の大形鉢，528の小形甕が出土している。小皿の内525は割れ口を施で撫でつけたような痕跡が残る。526は外面に縄状の痕跡がある。また図示していないが不定形の鉄滓（第19図版）が1点出土している。529～第28図572はB層から出土した土器である。このうち第27図529～第28図539は土師器坏，541，542は高台付坏，540，543～546は内外あるいは内面をヘラミガキし黒色処理した土師器高台付坏，547～573は小皿で，572は歪んだ小皿の底部である。

A層の遺物出土量は，激しい撹乱のためか，B層以下よりも少ない。図示できたのは第28図573の小皿と第30図603の刀子破片のみである。

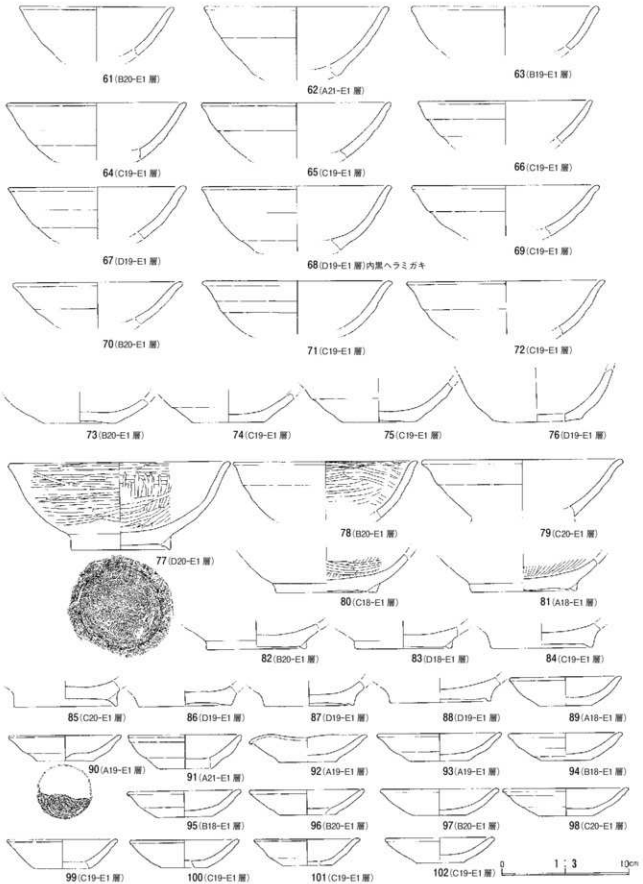
RE01竪穴建物跡とRD20土器焼成土坑の撹乱部分から第29図574～583の土器が出土した。574，575，577は土師器坏，576，578，579，581は高台付坏，または高台部分である。580～583は小皿である。また，竪穴建物精査中の排土の中から第29図592の碁石を採集している。全体に強く被熱して赤褐色になっている。



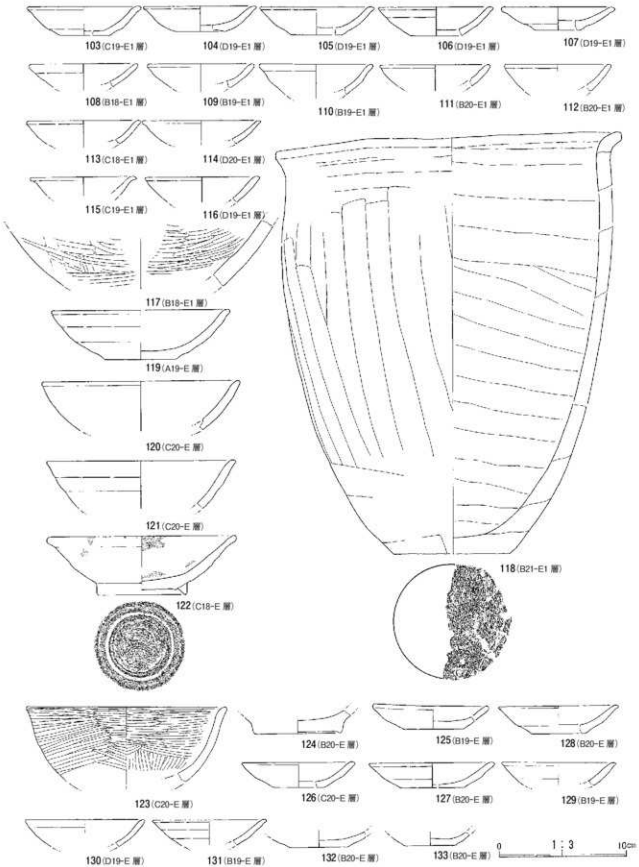
第 11 図　RE01 竪穴建物跡出土土器（1）



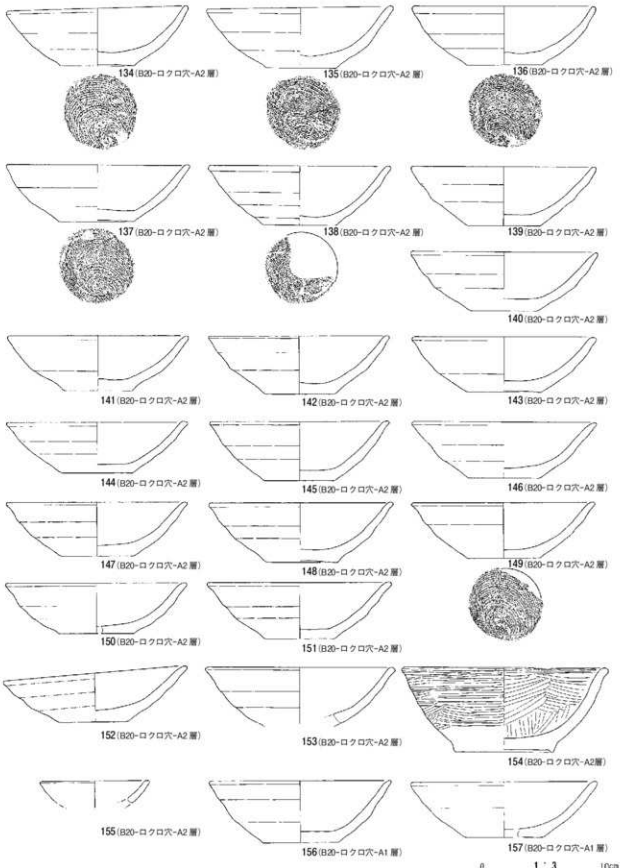
第 12 図　RE01 竪穴建物跡出土土器（2）



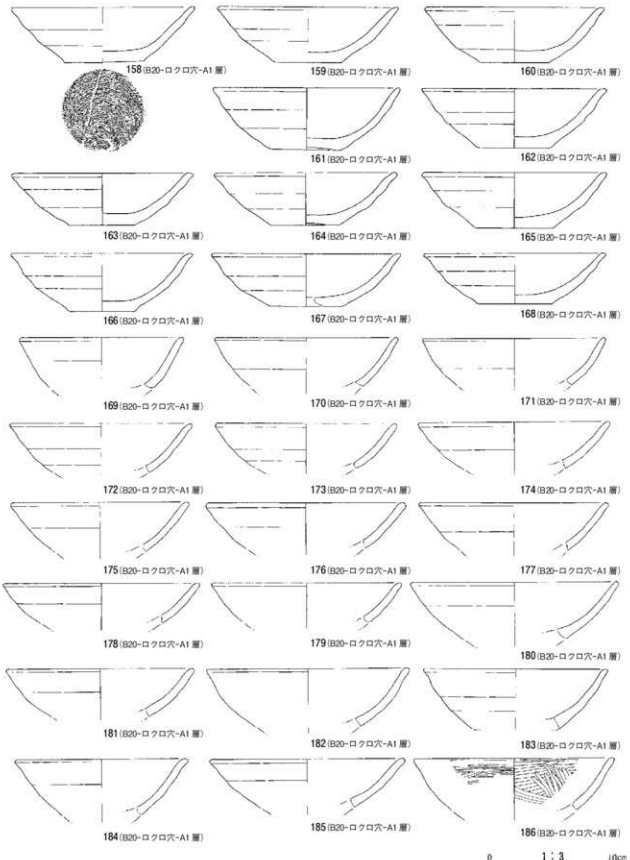
第 13 図　RE01 竪穴建物跡出土土器 (3)



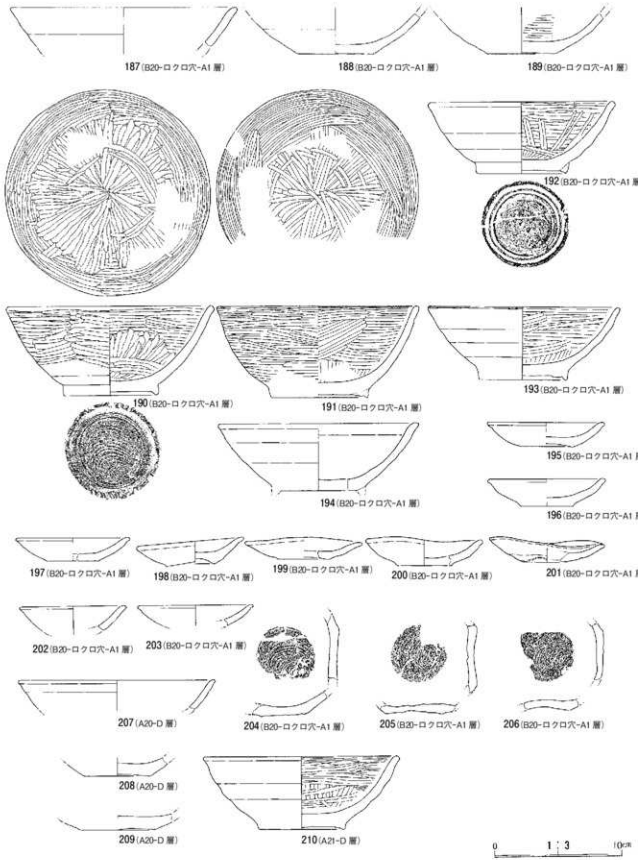
第 14 図　RE01 竪穴建物跡出土土器（4）



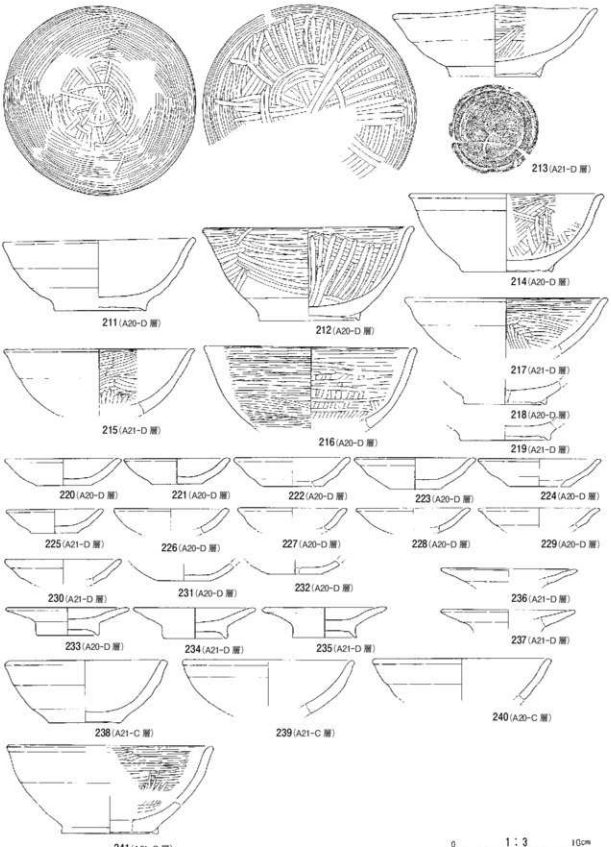
第15図　RE01竪穴建物跡出土土器（5）



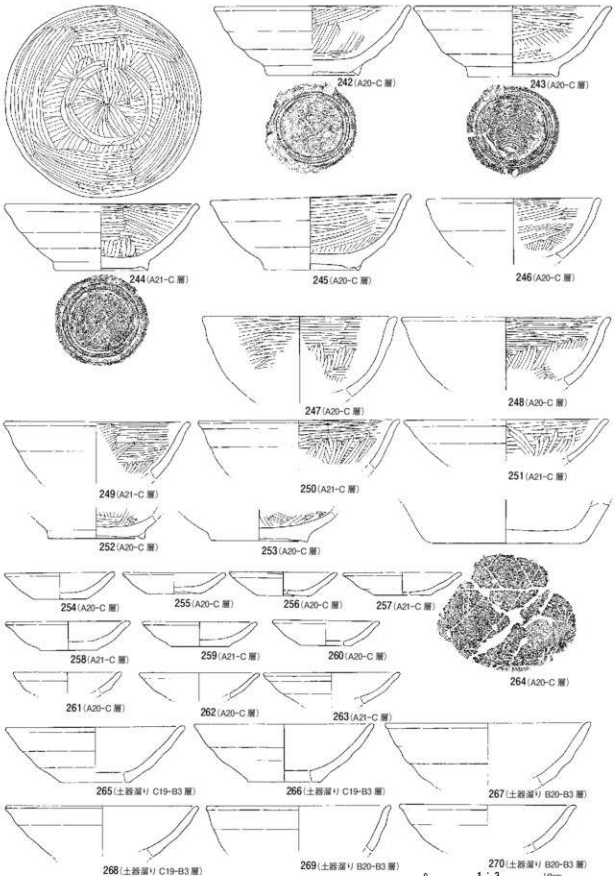
第 16 図　RE01 竪穴建物跡出土土器 (6)



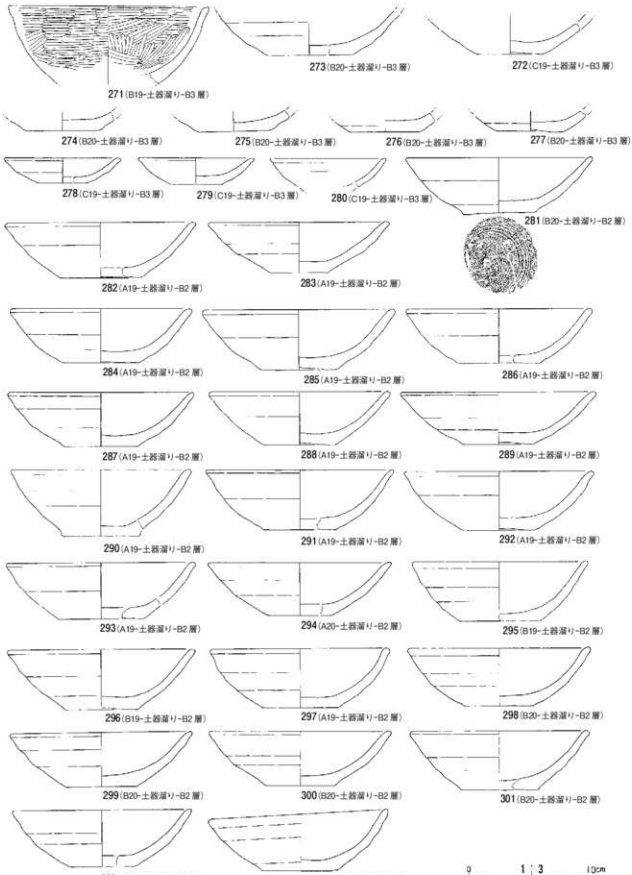
第 17 図　RE01 竪穴建物跡出土土器（7）



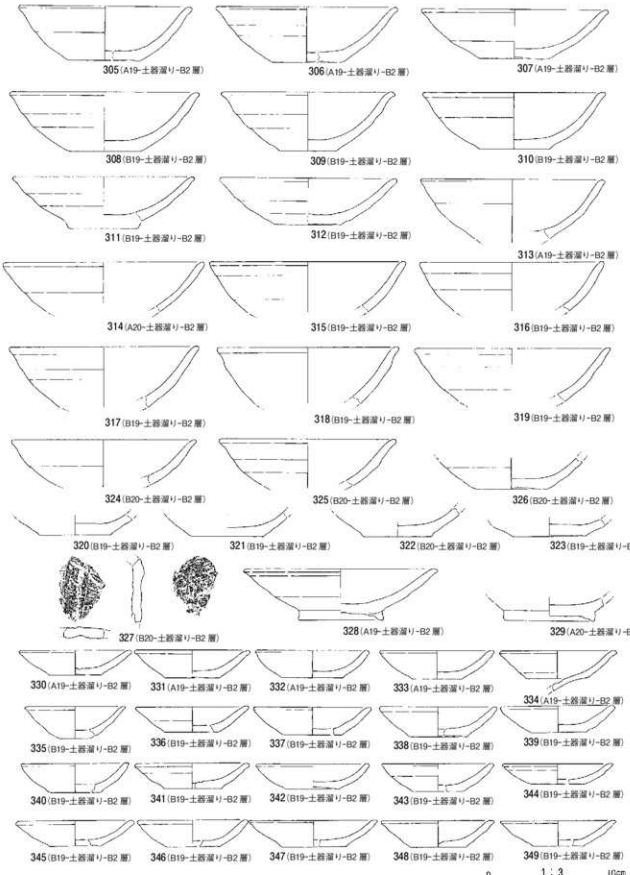
第 18 図　RE01 竪穴建物跡出土土器 (8)



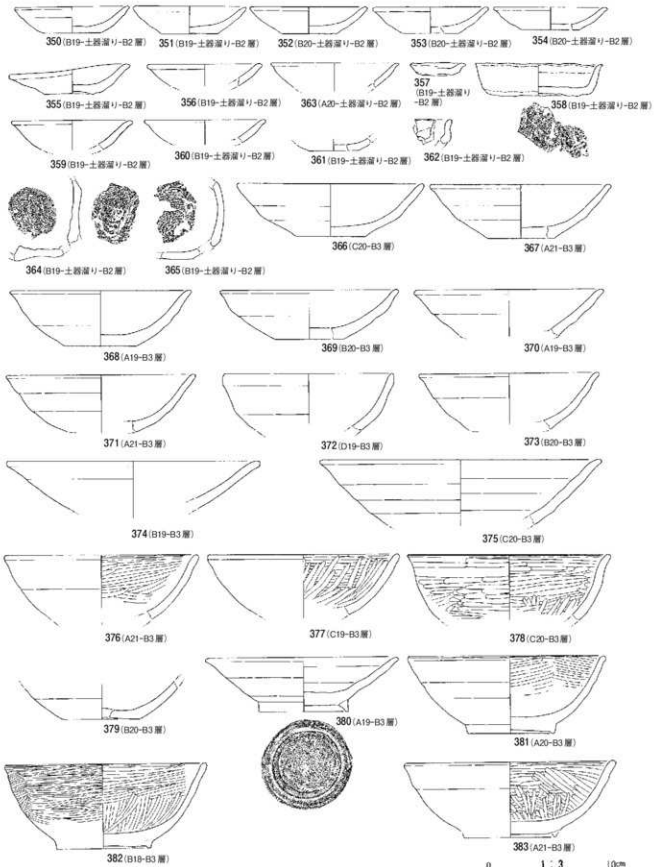
第 19 図　RE01 竪穴建物跡出土土器 (9)



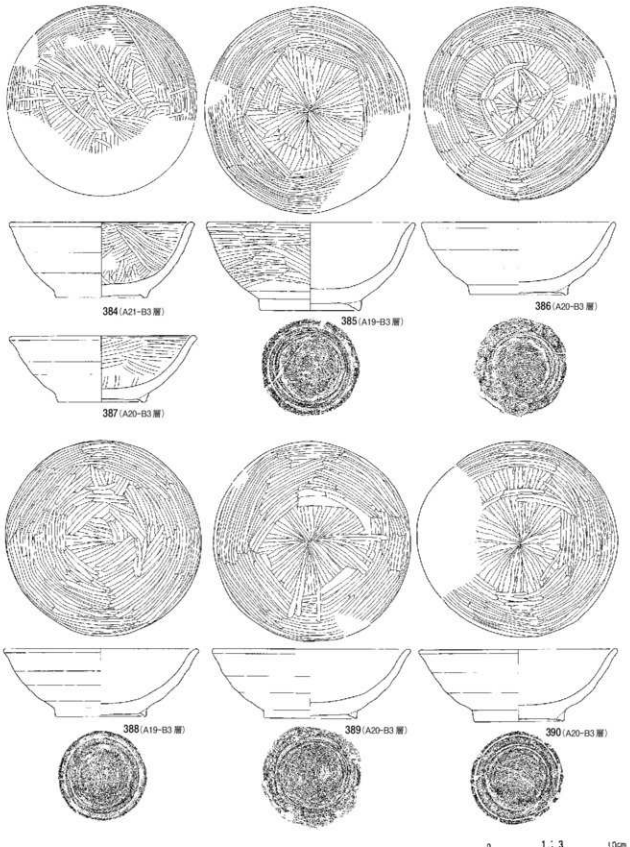
第 20 図　RE01 竪穴建物跡出土土器（10）



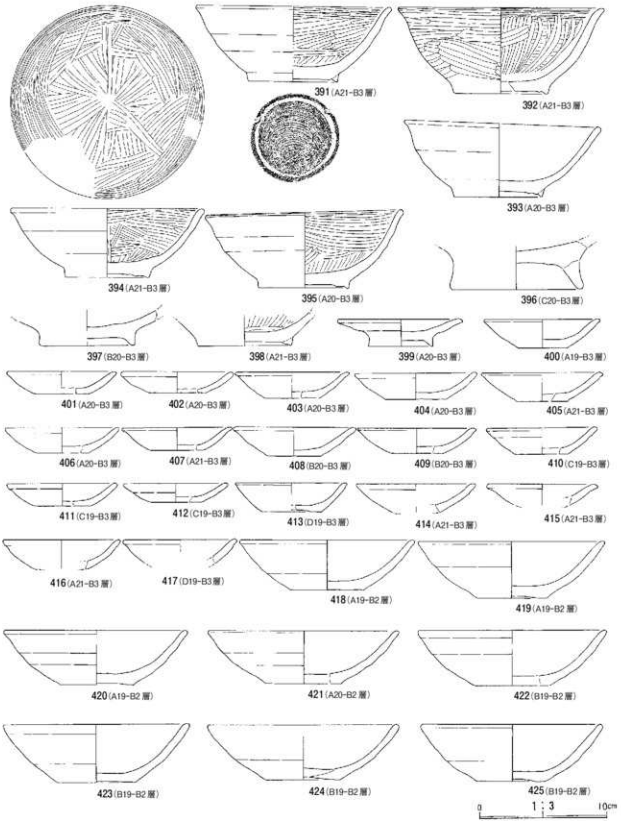
第 21 図　RE01 竪穴建物跡出土土器（11）



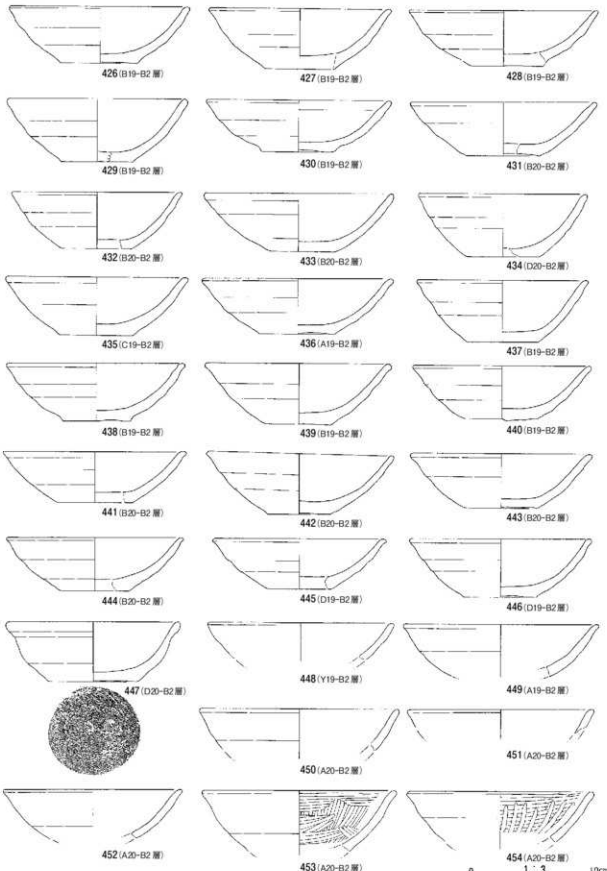
第 22 図　RE01 竪穴建物跡出土土器（12）



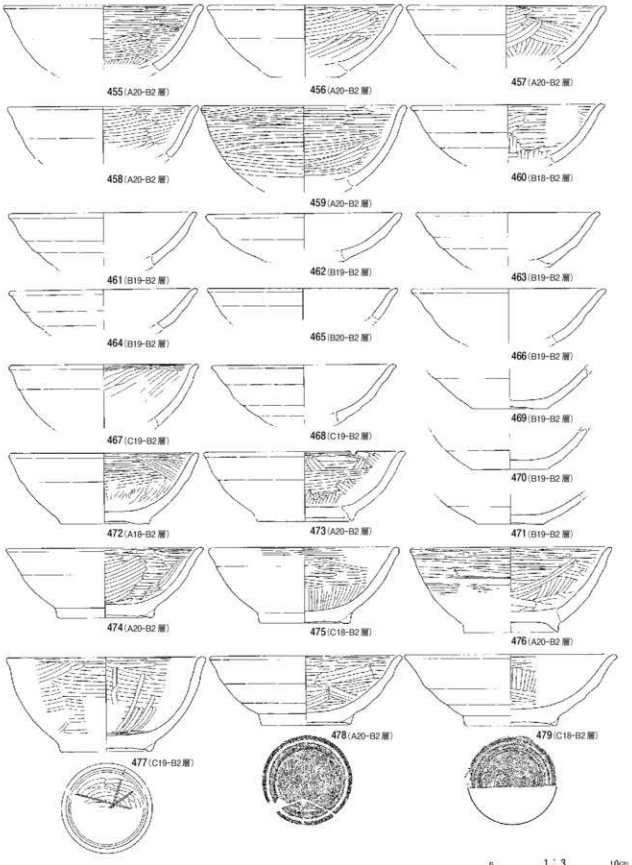
第23図　RE01竪穴建物跡出土土器（13）



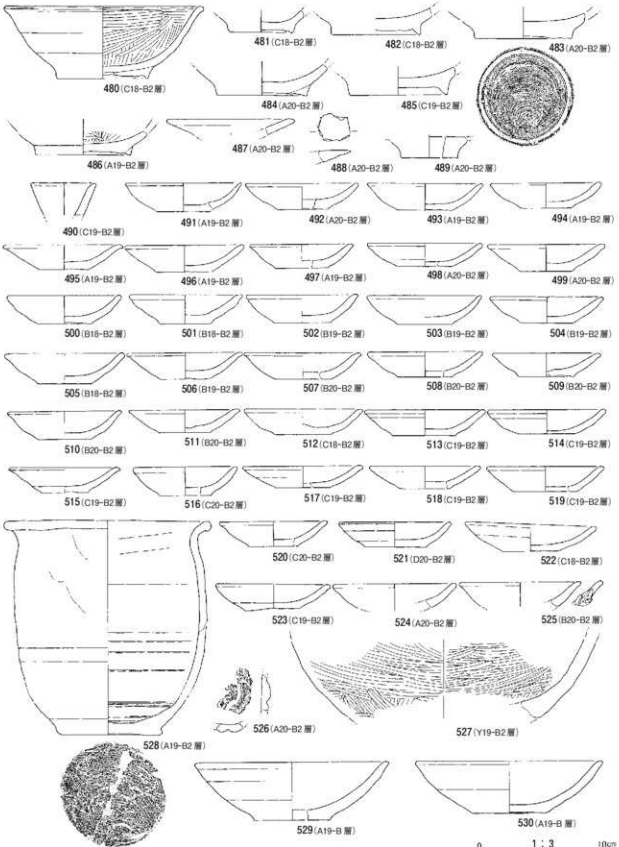
第 24 図　RE01 竪穴建物跡出土土器（14）



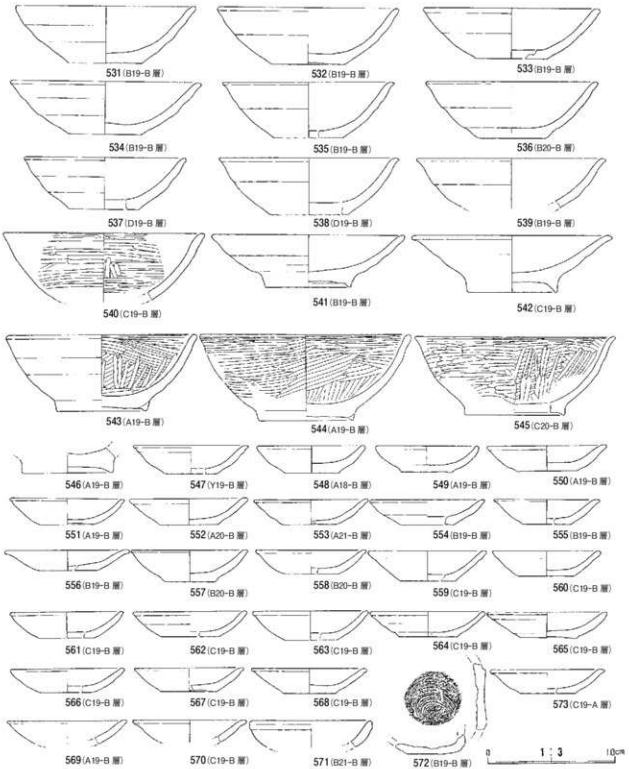
第 25 図　RE01 竪穴建物跡出土土器（15）



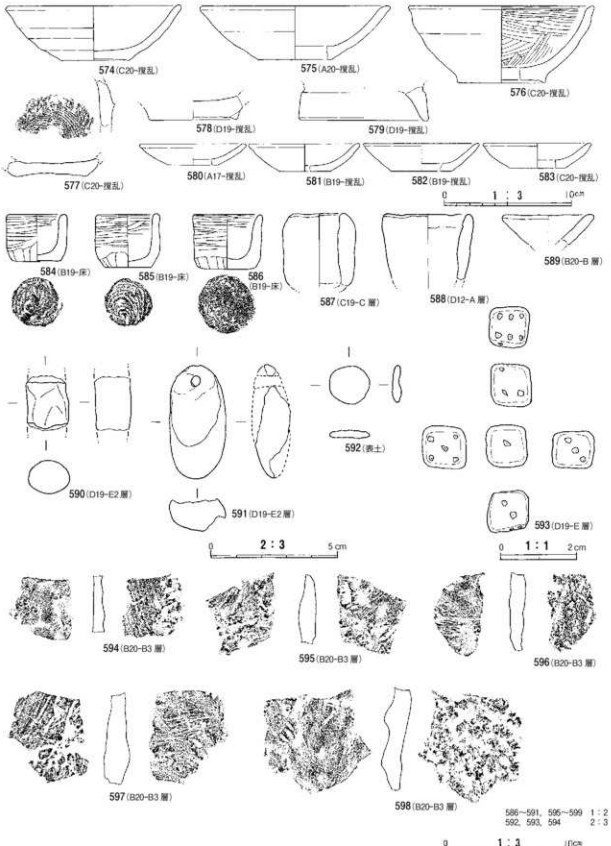
第 26 図　RE01 竪穴建物跡出土土器（16）



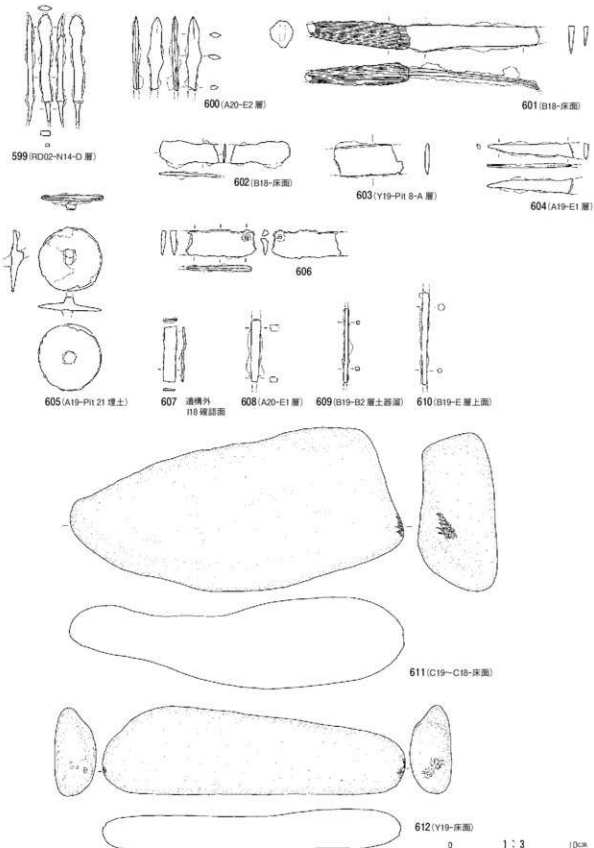
第 27 図　RE01 竪穴建物跡出土土器（17）



第 28 図　RE01 竪穴建物跡出土土器（18）



第 29 図　RE01 竪穴建物跡出土土器（19）



第 30 図　RE01 竪穴建物跡出土鉄製品，石器

RD18 土坑（第 10 図，第 46 図）

表土直下のⅢa 層上面に確認され，RE01 竪穴建物跡によって切られる土坑である。確認部分で南北 5.18 m，東西 2.3 m の不整形なプランで，88 cm の深さを持つ。埋土は次のとおりである。

A 層　黒褐色土主体（10YR2/1 シルト質植壌土に 10YR4/4 シルト質植土が 2% 混入し，粉状，しまり具合と硬さは中程度）

B 層　黒褐色土主体（10YR2/1 シルト質植壌土に 10YR4/4 シルト質植土が 40% 混入し，粒ないし塊状，密で硬い）

C1 層　黒褐色土主体（10YR2/1 シルト質植壌土に 10YR4/4 シルト質植土が 1% 混入し，粉状，密で硬い）

C2 層　黒褐色土主体（10YR2/1 シルト質植壌土に 10YR5/4 シルト質植土が 2% 混入し，粉ないし粒状，密で硬い）

D1 層　暗褐色土主体（10YR4/3 シルト質植土に 10YR2/2 シルト質植壌土が 20% 混入し，塊状，密で硬い）

D2 層　黒褐色土主体（10YR2/1 シルト質植壌土に 10YR5/3 シルト質植土が 40% 混入し，塊状，密で硬い）

このうち底面から第 46 図 5 と 6 の小皿，C1 層から 7 の小皿が出土している。

RD19 土坑（第 6 図，7 図）

Ⅲa 層上面に確認され，RE01 竪穴建物跡の張り出し部に遺構上部を削平されている。RE01 竪穴建物跡の張り出し先端部は，本土坑の壁の形状と一致している。西半分以上を近代以後に攪乱されているが，確認部分では径 1.3 m，深さ 52 cm の円形と推定される。埋土の層相は次の通りである。

A1 層　黒褐色土主体（10YR2/2 シルト質植壌土に 7.5YR3/1 シルト質植壌土 20%，5YR4/3 焼土 10% 混合し粒状ないし塊状，しまりはやや密でやや硬い）

A2 層　黒褐色土主体（10YR2/2 シルト質植壌土に 10YR4/4 シルト質植土 15% 混合し粒状ないし塊状，しまりと硬さは中程度である）

A3 層　黒褐色土主体（10YR2/2 シルト質植壌土に 10YR4/4 シルト質植土 10% 混合し粒状ないし塊状，しまりと硬さは中程度である）

A4 層　黒褐色土主体（10YR2/2 シルト質植壌土に 10YR4/4 シルト質植土 25% 混合し粒状ないし塊状，しまりと硬さは中程度である）

以上の層相は，RE01 竪穴建物跡の E 層の粘土以外の土と近似している。埋土中から遺物は出土していない。

RD02 土器焼成土坑（第 30 図～第 35 図）

調査区中央部のⅢa 層上面に確認された土坑で，試掘調査段階からこの地点に遺物が集中していたところである。土坑のプランは円形で南北 2.04 m，東西 2.02 m，深さは 32 cm である。壁はゆるやかで皿状に掘りこまれている。埋土は上から A1 層～A4 層，B 層，C1，C2 層，D1，D2 層に分層される。層相は次の通りである。

A1 層　黒褐色土主体（10YR2/2 シルト質植壌土を基本とし，7.5YR3/2 シルト質植壌土 5%，10YR シルト質植壌土 3% 混入し粉ないし粒状，層のしまりと硬さは中程度）

A2 層　黒褐色土主体（10YR2/2 シルト質植壌土を基本とし，10YR6/2 灰 40% 混入し，粉ないし塊状，層のしまりと硬さは中程度）

A3 層　黒褐色土主体（10YR2/2 シルト質植壌土を基本とし，10YR7/2 灰 40%，5YR6/3 焼土 5% 混入し，粉ないし塊状，層のしまりは中～密，硬さは中～硬程度）

A4 層　黒色土主体（10YR2/1 シルト質植壌土を基本とし，5YR6/2 焼土 10%，10YR6/2 灰 20% 混入，粉ないし塊状で，しまりと硬さは中程度，炭化物を多く含んでいる）

B層　黒褐色土主体（10YR3/2 シルト質植壌土を基本とし，5YR6/3 焼土 10%，7.5YR 灰 20% 混入し，粉ないし粒状，しまりは中～密，硬さは中～硬）

C1 層　鈍い赤褐色の灰主体（5YR4/3 灰を基本とし，5YR4/4 焼土 5% 混入，粉～粒状，しまりと硬さは中程度）

C2 層　灰褐色の灰主体（5YR5/2 灰を基本とし，5YR4/4 焼土 15% 混入，粉ないし粒状，しまりと硬さは中程度）

D1 層　黒色土主体（7.5YR1.7/1 シルト質植壌土を基本とし，10YR2/2 シルト質植壌土 20%，5YR4/4 焼土 10% 混入，粉～粒状，しまりは中～密，硬さは中～硬）

D2 層　黒褐色土主体（7.5YR2/1 シルト質植壌土を基本とし，5YR4/4 焼土 5% 混入し粉状，しまりは中～密，硬さは中～硬，炭化物を多く含んでいる）

このうちC1 層～C2 層は灰層であり，上面は比較的平坦である。D2 層下の底面には径 22 cm の不整形な薄い焼土があり，周囲に細かい炭化物の拡がりがある。

出土遺物には多くの土師器坏，小皿，高台付坏，甕破片と鉄鏃 1 点がある。第 32 図 1～21 は D 層から出土した土師器である。1～5 はロクロ坏，6 と 7 は高台付坏の底部。8～21 は小皿である。22～87 は C 層及び C 層上面から出土した土師器である。このうち 22～34 はロクロ坏で高台付坏の可能性がある。26 と 30 は内外ヘラミガキ，黒色処理された坏である。33～35 はロクロ坏，36 は高台付坏の底部である。37～84 は小皿である。このうち 43 は完形で C 層中に正位で出土した（No.4）。第 33 図 85 と 86 は A3 層下部（C 層上面）に正位で重ねられていたもの（No.1，2）。87 は A3 層下部（C 層上面）に伏せた状態で出土した（No.3）。第 33 図 88～第 35 図 212 は A 層から，213 は検出面から出土した土師器である。88～125 は土師器坏で，94 は内面ヘラミガキと黒色処理の坏，105，108 は内外ヘラミガキと黒色処理の土師器坏である。126～134 は高台付坏で 126 は内外ヘラミガキの黒色処理，127，128 は内面ヘラミガキと黒色処理の高台付坏である。135～207 は小皿である。208 と 210 は手捏ねの小形甕で同一個体の可能性がある。209 は土師器甕の口縁部，211 は土師器甕の底部，212 は粘土塊，213 はロクロ坏である。第 30 図 599 は鉄鏃であるが先端部を欠損し，身部が蛇行しているのか特徴である。

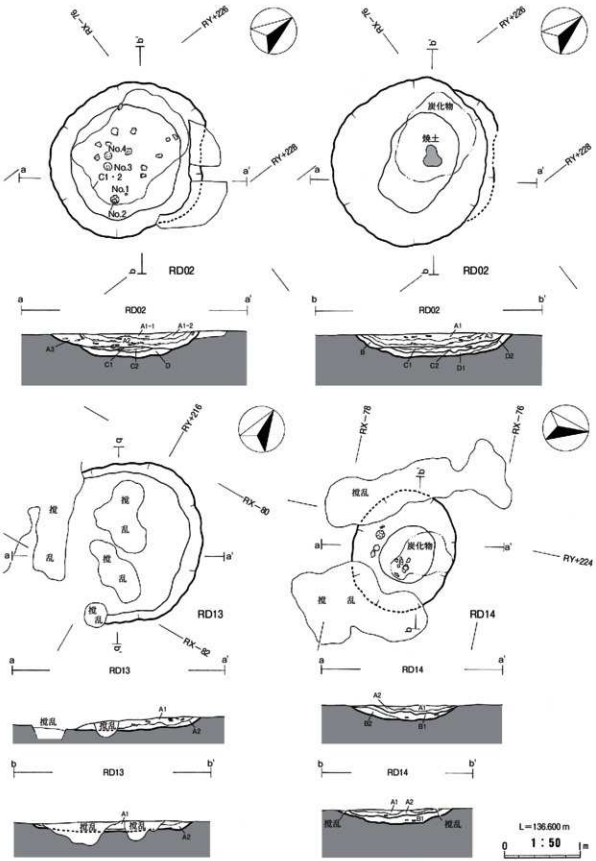
RD13 土坑（第 31 図，第 36 図）

調査区の西部で RE01 竪穴建物跡の東方に存在する土坑で，Ⅲa 層上面で確認された。RD16 土坑の一部を切って構築されている。耕作による撹乱が底面にまで及んでおり，西壁が失われているなど残存状況は良好ではない。径 2.1 m，深さ 16 cm の円形土坑で，壁は緩く立ち上がり底面は概ね平坦である。規模と形状から土器焼成土坑の可能性もあるが，焼土や灰の堆積は認められなかった。埋土は A1 層と A2 層に分かれる。

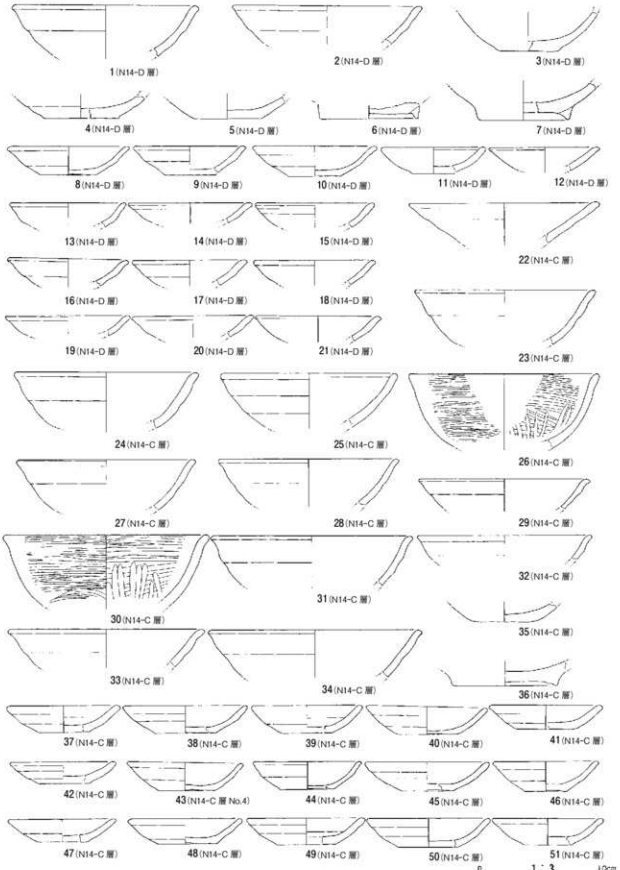
A1 層　黒褐色土主体（7.5YR3/1 シルト質植壌土を基本とし，5YR5/8 焼土 1%，10YR3/4 シルト質植土 7% 混入，粉～粒状，しまり中～密，と硬さは中～硬，炭化物を含む）

A2 層　黒褐色土主体（105YR3/2 シルト質植壌土を基本とし，10YR4/3 シルト質植土 7% 混入，粉～粒状，しまり中～密，と硬さは中～硬）

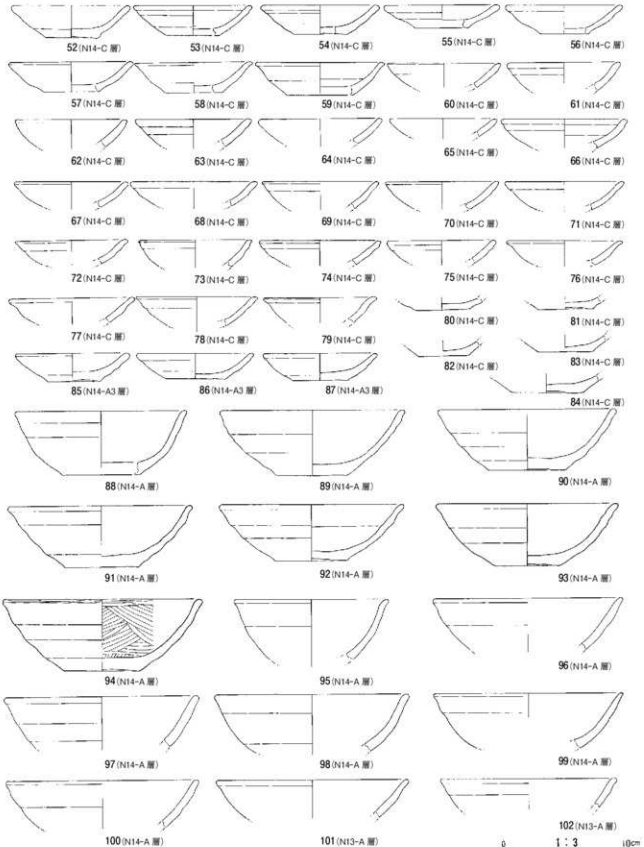
第 36 図 1～7 は A 層中及び土坑に重なる撹乱から出土した土器である。1～5 は A 層出土の土器で 1 はロクロ坏，2～5 は高台付坏で，2 と 3 は内外ヘラミガキで黒色処理されたものである。3 の底部高台内には箆による刻書が認められる。6 は撹乱から出土した小皿，7 は土坑内撹乱出土の甕口縁部でロクロは使用されていない。



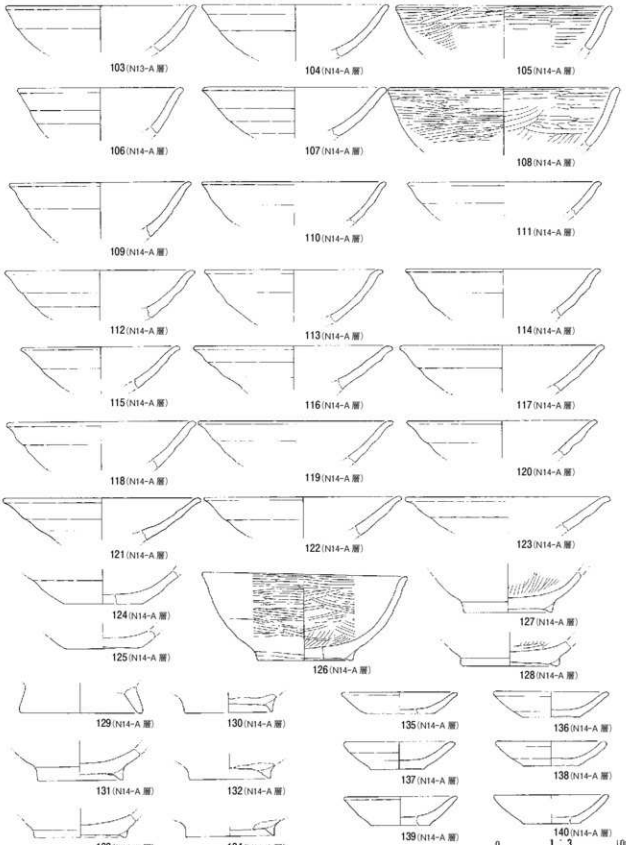
第 31 図　RD02 土器焼成土坑，RD13 土坑，RD14 土器焼成土坑



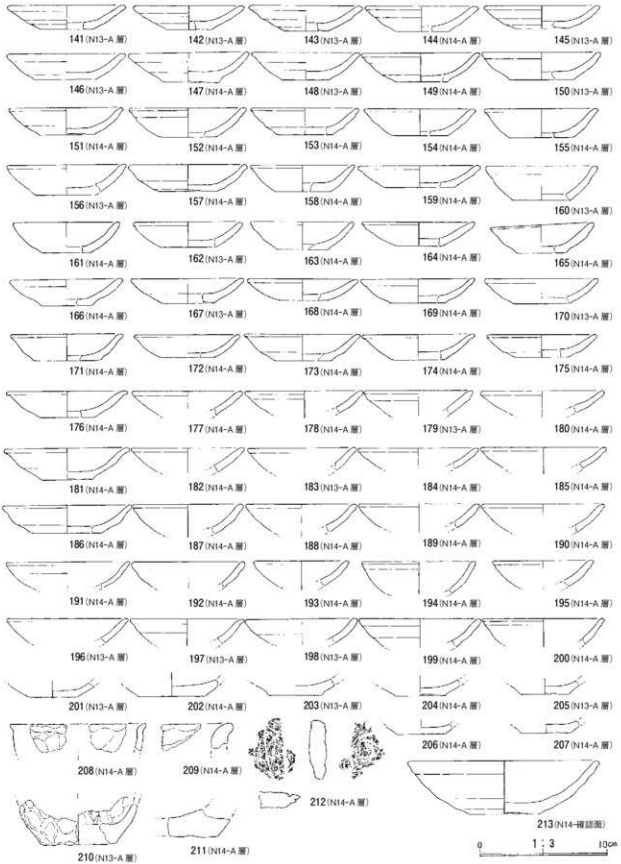
第 32 図　RD02 土器焼成土坑出土土器（1）



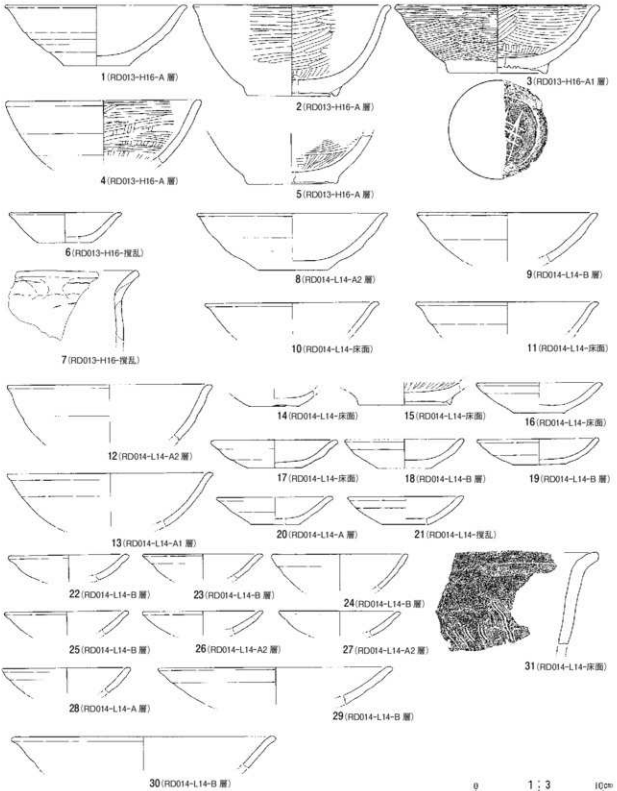
第 33 図　RD02 土器焼成土坑出土土器（2）



第 34 図　RD02 土器焼成土坑出土土器（3）



第 35 図　RD02 土器焼成土坑出土土器（4）



第 36 図　RD013 土器，RD014 土器焼成土坑出土土器

RD14 土器焼成土坑（第31図，第36図）

RD02 土器焼成土坑の西側にあり，Ⅲa 層上面で確認された。撹乱が著しいが，東西 1.4 m，南北 1.4 m 以上の楕円形で，深さは 20 cm である。埋土は A1 層，A2 層，B1 層，B2 層に分かれている。層相は以下の通り。

A1 層　黒色土主体（10YR2/1 シルト質植壌土を基本とし，10YR3/2 シルト質植壌土 2%，5YR4/4 焼土 5% 混入，粉～粒状をなし，土層のしまりは中～密，硬さは中～硬）

A2 層　黒褐色土主体（10YR2/2 シルト質植壌土を基本に，10YR3/4 シルト質埴土 10%，5YR5/4 焼土 25%，10YR6/1 灰 15% 混入し，粉～塊状をなす，しまりは中～密，硬さは中～硬）

B1 層　黒褐色土主体（10YR2/2 シルト質植壌土を基本とし，10YR6/1 灰 2%，7.5YR4/4 シルト質埴土 5% 混入，粉～粒状をなす，しまりは中～密，硬さは中～硬で，多量の炭化物を含む）

B2 層　黒褐色土主体（10YR2/2 シルト質植壌土を基本とし，7.5YR4/4 シルト質埴土 7% 混入，粉～粒状をなす，しまりは中～密，硬さは中～硬）

第 36 図 8～31 は埋土中から底面より出土した土器である。このうち 10，11，14，15，16，31 は底面から，9，18，19，22～25，30 は B 層，8，12，27 は A2 層から，13，20，28 は A1 または A 層出土，21 は土坑内撹乱からの出土である。8～14 はロクロ坏，15 は内面ヘラミガキと黒色処理の高台付坏，16～28 は小皿，29，30 は大ぶりのロクロ坏，31 は外面に刷毛目のあるロクロを使用していない甕の口縁部である。

RD11 土坑，RD12 土坑（第37図，第38図）

RD02 土器焼成遺構の西側に重複して確認された土坑で，いずれも Ⅲa 層上面で確認されている。重複関係は RD12 土坑が RD11 土坑に切られ，RD11 土坑を RD02 土器焼成土坑が切って構築されている。

RD11 土坑は径 96 cm の円形で深さは 20 cm，浅いレンズ状の断面形をなす。埋土は黒色土主体（10YR2/1）のシルト質植壌土で褐色シルト質植壌土が A1 層では 2%，A2 層では 15% 混合している。自然堆積層である。埋土中から土師器坏破片が少量出土している。

RD12 土坑は長軸 4.72 m，短軸 3.23 m で深さ 50 cm，壁面は比較的整っているが底面には凹凸がある。埋土は埋め戻された様相である。各層相は次のとおり。

A1 層　黒色土主体（10YR2/1 シルト質植壌土を基本とし 10YR3/2 シルト質植壌土が 5% 混入し粉状，締りと硬さは中程度）

A2 層　黒色土主体（10YR2/1 シルト質植壌土を基本とし 10YR4/3 シルト質植土が 7% 混入し粉状，締りと硬さは中程度である）

B1 層　黒褐色土主体（10YR2/2 シルト質植壌土を基本とし 10YR4/4 シルト質埴土 40%，10YR3/2 シルト質埴土 10% 混入し塊状，締りは中～密，硬さは中～硬）

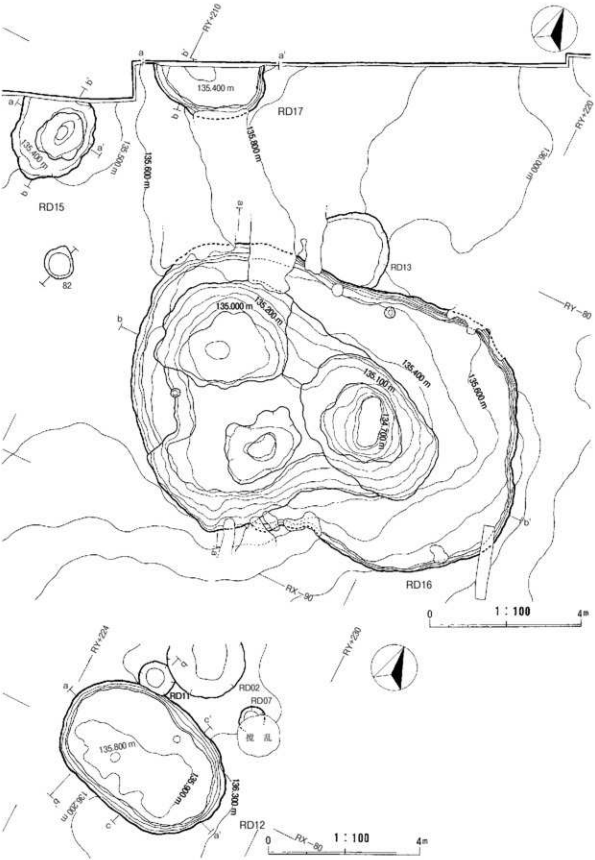
B2 層　黒褐色土主体（10YR2/2 シルト質植壌土を基本とし 10YR3/2 シルト質埴土 20% 混入し塊状，締りは中～密，硬さは中～硬）

埋土中から土師器坏・小皿・高台付坏の破片が出土している。

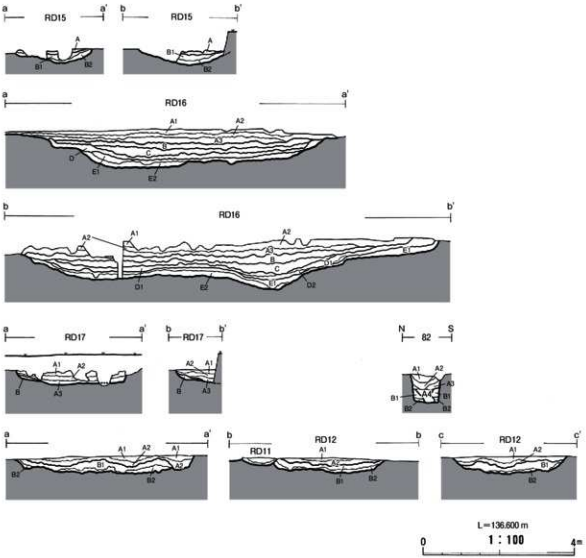
RD15 土坑（第37図，38図）

調査区北西部の Ⅲa 層上面に確認された土坑で，径 2 m～2.3 m，深さ 38 cm あり，凹凸の著しい不整形プランのである。埋土は次の通りである。

A 層　黒褐色土主体（10YR2/2 シルト質植壌土を基本とし，10YR4/4 シルト質埴土が 20% 混入し粉～粒状をなす，



第37図　RD11, 12, 15, 16, 17土坑



第 38 図　RD11, 12, 15, 16, 17 土坑土層断面図

締りは密で硬い）

B1 層　黒色土主体（10YR2/1 シルト質埴壌土を基本とし，10YR3/2 シルト質埴壌土 10% 混入，粉状，締りは密で硬い）

B2 層　黒色土主体（10YR2/1 シルト質色壌土を基本，10YR4/3 シルト質埴土 7% 混入し粉状，締りは見乙で硬い）

埋土中から土師器小破片が少量出土している。

RD16 土坑（第 37 図，38 図）

RD13 土坑に一部重複する大型の不整形土坑で，Ⅲa 層上面で確認された。長軸 11 m，短軸 6.6 m～7.5 m あり，Ⅲa 層からⅣ層にかけて掘り込まれ，底部には大まかに 3 つの深みがあり起伏がある。深さは 0.8 m～1.2 m である。埋土は A 層から E 層に分かれているが，ほぼ全て自然堆積で埋没している。各層相は次のとおりである。

A1 層　黒色土主体（7.5YR1.7/1 シルト質埴壌土を基本とし，7.5YR5/6～10YR2/3 シルト質埴壌土が 1%～7% 混入し，粉状，締りは中～密，硬さは中～硬）

A2 層　黒色土主体（7.5YR1.7/1 シルト質植壌土を基本とし，7.5YR5/6～10YR2/3 シルト質植壌土が 3%～7% 混入し，粉状，締りは中～密，硬さは中～硬）

A3 層　黒色土主体（7.5YR1.7/1 シルト質植壌土を基本とし，10YR3/4～4/4 シルト質植土が 7%～10% 混入し，粉～粒状，締りは中～密，硬さは中～硬）

B 層　黒色土ないし黒褐色土主体（10YR1.7/1～2/シルト質植壌土を基本とし，7.5yr2/3～5/6 シルト質埴土が 10%～30% 混入，粉～粒状，締りは密で硬い）

C 層　黒色土主体（7.5YR1.7/1～10YR2/1 シルト質植壌土を基本とし，5YR5/6 焼土 5%，7.5YR2/2 シルト質埴土 7%，10YR6/6 シルト質埴土 3% 混入し粉～粒状，）締りは中～密，硬さは中～硬）

D1 層　黒色土主体(7.5YR2/1シルト質植壌土を基本とし，10YR4/3 シルト質埴土 10%，5YR5/6 焼土3%，7.5YR3/4 シルト質埴土 10% 混入し粉～粒状，締りは中～密，硬さは中～硬）

D2 層　暗褐色土主体（10YR3/4 シルト質埴土を基本とし，10YR4/3 シルト質埴土 20%，10YR3/3 シルト質埴土 3% 混入し，粉～粒状，密で硬い）

E 層　黒褐色土主体（10YR2/1 シルト質埴土を基本とし，10YR5/4 シルト質埴土 10%，7.5YR4/6 焼土 2% 混入し粉～粒状，締りは中～密，硬さは中～硬）

出土遺物はＣ層から第 46 図 1 の高台付坏，Ｂ層から 4 の鉢口縁部で内外ヘラミガキ黒色処理されているもの，Ａ層から 3 の内外ヘラミガキ黒色処理の鉢の体部，第 46 図 24 の縄文時代の磨製石斧が出土している。このほか土師器の坏，高台付坏，小皿，鉢，甕の破片が出土している。

RD17 土坑（第 37 図，38 図）

調査区の北辺，RD13 土坑北西側のⅢa 層上面で確認された。北側が調査区外であるが径 3 m 内外の円形または楕円形と推定され，深さは 40 cm である。埋土は次の通りである。

A1 層　黒褐色土主体（10YR2/2 シルト質色壌土基本，10YR4/3 シルト質埴土 1% 混入，粉状，締りは中～密，中～硬）

A2 層　黒褐色土主体（10YR2/2 シルト質色壌土基本，10YR4/3 シルト質埴土 5% 混入，粉状，締りは中～密，中～硬）

A3 層　黒色土主体（10YR2/1 シルト質色壌土基本，10YR4/3 シルト質埴土 7% 混入，粉状，締りは中～密，中～硬）

B 層　黒色土主体（10YR2/1 シルト質色壌土基本，10YR3/3 シルト質埴土 10%，10YR4/4 シルト質埴土 5% 混入，粉状，締りは中～密，中～硬）

埋土中から土師器坏や小皿の小破片が少量出土している。

掘立柱建物跡，柱列跡，柱穴群（第 39 図～第 42 図）

調査区東側を中心に，4 棟の掘立柱建物跡や 2 条の掘立柱列跡，82 口の柱穴群がⅢa 層上面より確認された。柱穴の内 P82 は大形の柱穴で RD16 土坑の西に単独で存在する。柱穴の柱痕跡（A 層）は円形で，黒色土または黒褐色土を主体とし，掘形の埋土（B 層またはＣ層）は黒褐色土主体に褐色または暗褐色土が粒状や塊状で混入している。掘立柱建物跡や柱列跡，それ以外の柱穴の中からは土師器坏，小皿などの小破片が出土しており，柱穴の多くが平安時代後期ごろと考えられる。またこのほかにも RG01 溝を切る柱穴 3 口が存在するが，これは埋土や重複関係から近代以後の新しい柱穴と判断される。

RB01 掘立柱建物跡は梁行 2 間×桁行 3 間の建物で棟方向は N49°W を示す。RB03 掘立柱建物跡と重複するが柱穴の

重複はないため新旧関係は不明である。東側柱筋は総長6.29 m，西側柱筋は総長5.72 m，北妻の梁行総長は3.32 mで，南妻梁行は直角とはならず，歪んでいる。

RB02 掘立柱建物跡は梁行2間，桁行2間以上の建物で棟方向はN28°W を示す。南側は調査区外へと伸びている。北妻の梁行の総長は3.94 m である。

RB03 掘立柱建物跡は梁行，桁行とも2間の建物であるが，桁行の柱間が長く，棟方向はN55°E を示す。梁行の総長は4.19 m，桁行の総長は7.04 m である。P2と P3の間に P25があり，P5と P7の中間に RB01 掘立柱建物の P8があり，P8は重複の可能性もあることから，桁行が4間，梁行2間の建物の可能性もある。

RB04 掘立柱建物跡は梁行1間×桁行3間の掘立柱建物で，梁行の総長4.3 m，桁行の総長は北側で7.4 m，南側柱筋で7.16 m である。主軸はN56°E を示す。桁行の柱のうち東端から2つ目の柱穴は撹乱で失われている。

RC01 掘立柱列跡はN58.5°E を示し，総長4.48 m で2間。RC02 掘立柱列跡はN46.5°E を示し，総長9.87 m で3間の柱間である。

縄文時代の土坑（第43図，48図）

RD08, 09, 10は，遺構の形態や埋土から見て縄文時代の土坑である。

RD08 隔し穴状土坑は長さ3.77 m，上幅0.76 m，底幅0.15 m，深さ1.2 m の大きさで，埋土は A 層が黒褐色土主体，B 層は黒褐色土と暗褐色土，褐色土混合土である。

RD10 隔し穴状土坑は RG01 溝に上部を切られている。長さ3.52 m，上幅0.6 m～0.85 m，下幅0.12 m，深さ1.04 m である。埋土 A 層は黒色土ないしは黒褐色土主体。B 層は黒褐色土と褐色土，暗褐色土の混合土である。

RD09 土坑は径1.2 m 内外の不整円形で深さは33 cm，埋土は暗褐色土または黒褐色土主体で，褐色土粒が混入する。

中近世以後の土坑と溝（第44図，45図）

RD01 土坑は1.94 m×2.45 m，深さ20 cm～28 cm の土坑で，埋土は A 層が黒褐色土に褐色土が混入，B 層が黒褐色土と褐色土の混合土である。埋土から近世～近代の土坑である。

RD03 土坑は幅1.65 m，長さ2.2 m 以上，深さ30 cm の浅い土坑で，埋土は黒褐色土主体で褐色土粒が混入している。近世以後の土坑である。

RD04 土坑は幅1.1 m，長さ1.58 m，深さ24 cm の楕円形の土坑で，埋土は黒褐色土主体である。年代は近世以後の土坑である。

RD05 土坑は径0.98 m，深さ12 cm の円形土坑で，埋土は黒褐色土主体である。埋土から近世以後の土坑である。

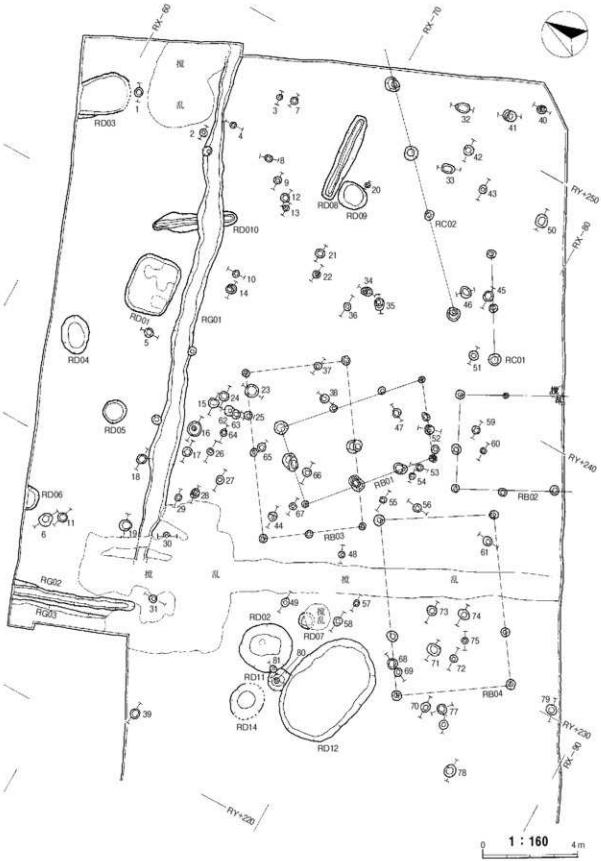
RD06 土坑は径1 m，深さ18 cm の円形土坑で，埋土は黒褐色土主体である。埋土から近世以後の土坑である。

RD07 土坑は径67 cm，深さ21 cm の土坑で，埋土は黒褐色土主体で，褐色土粒が混入している。中世以後の土坑の可能性が高い。

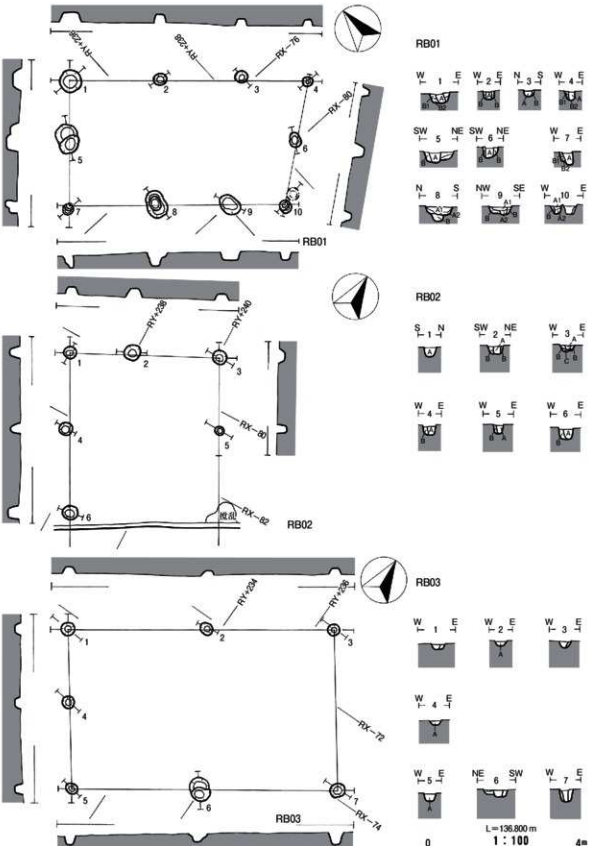
RG01～03溝は表土に近い黒褐色土ないし暗褐色土主体の埋土であり，RG03からは図示していないが鉄製鏃や銅製の煙管吸い口，陰鉄が出土していることから 溝内の堆積は近代以後である。

遺物包含層及び遺構外出土遺物（第46図）

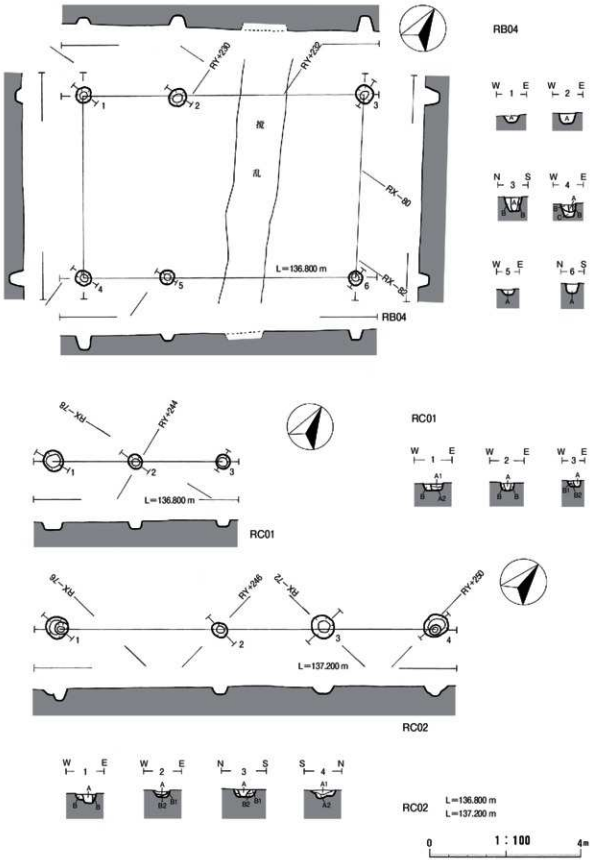
第46図8～17は遺構外の検出面または撹乱から出土した土師器で8～16は小皿，17は小型の坏底部である。18～23は第3次調査区東よりの表土から出土した縄文土器で大木8a式の深鉢形土器の破片である。



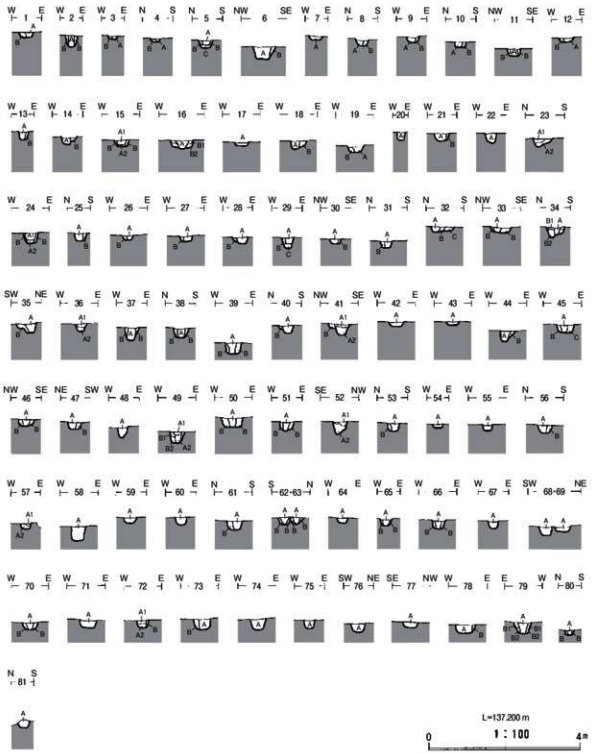
第 39 図　掘立柱建物跡，掘立柱列跡，柱穴群



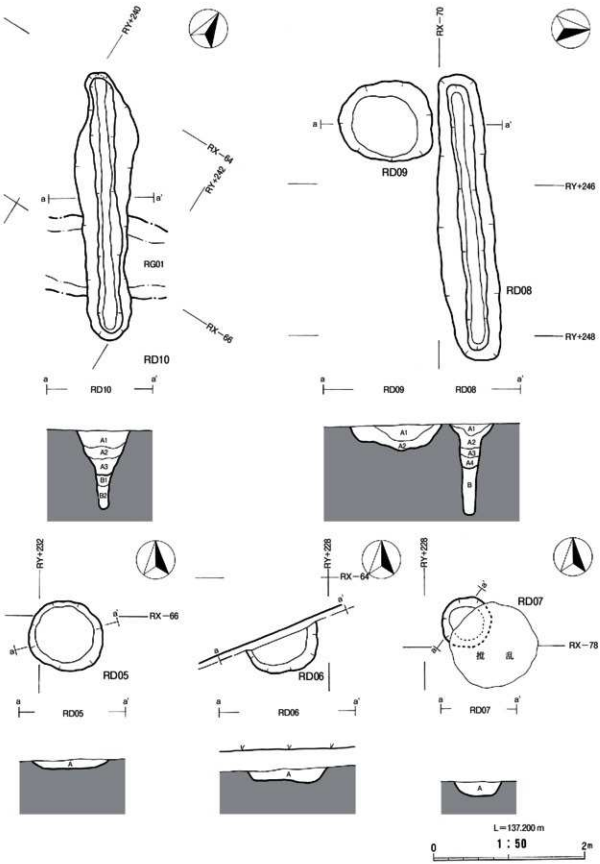
第 40 図　RB01～RB03 掘立柱建物跡



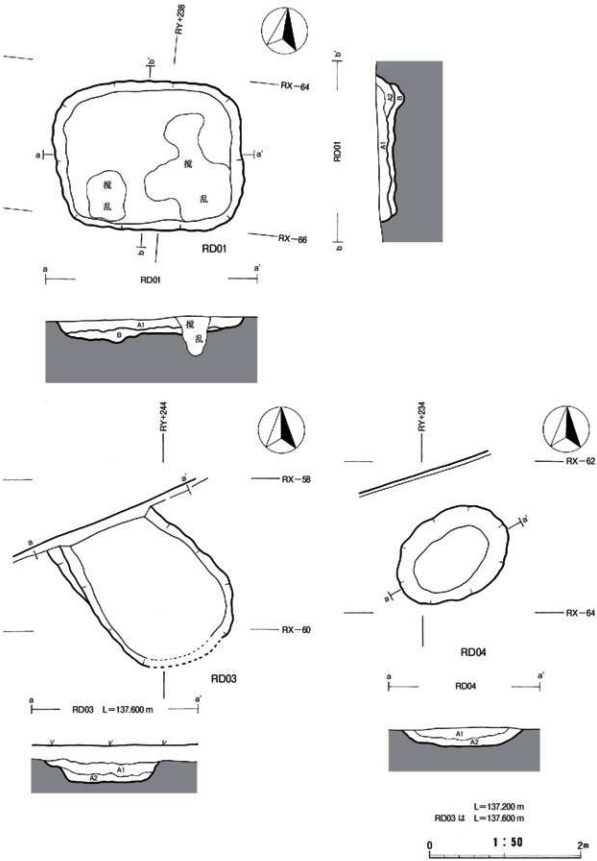
第 41 図　RB04 掘立柱建物跡，RC01, 02 掘立柱列跡



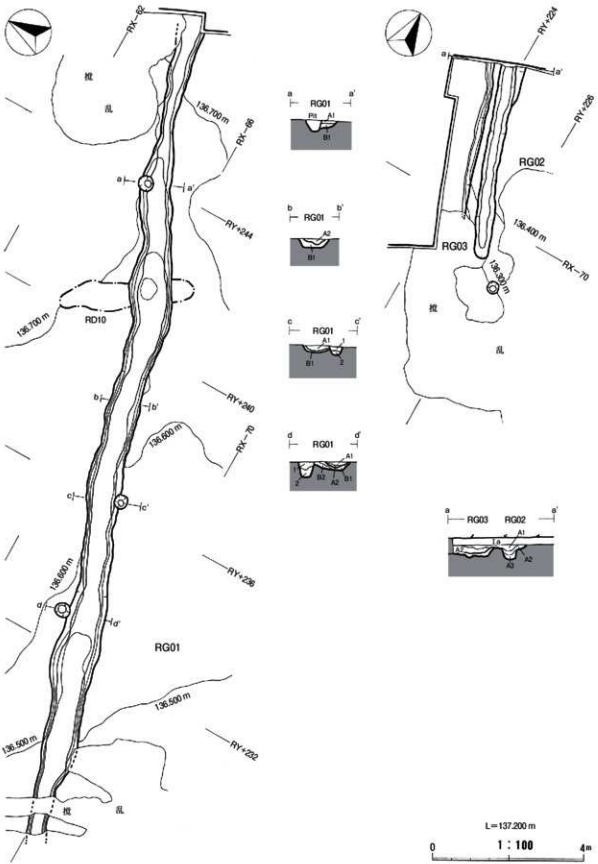
第 42 図　柱穴群土層断面図


RY+240
RX−64
RY+242
RX−66
RG01
RD10
RD10
RX−70
RD09
RY+246
RD08
RY+248
RD09
RD08
A1
A2
A3
B1
B2
A1
A2
A3
A4
B
RY+232
RX−66
RD05
RD05
RY+228
RX−64
RD06
RD06
RY+228
RD07
RX−78
撹 乱
RD07
A
A
A
L＝137.200 m
0
1：50
2m

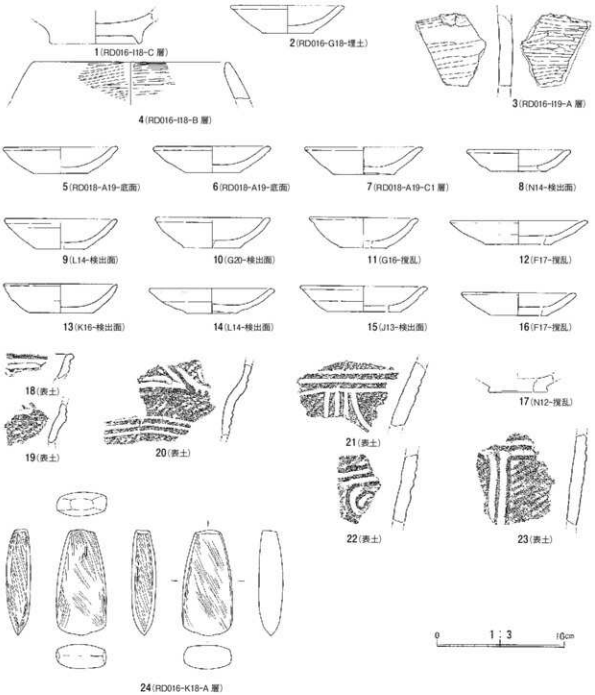
第 43 図　土坑（1）


RY+228
RX−64
RX−66
RD01
撹
乱
A1
B
RY+244
RX−58
RX−60
RD03
RD03 L=137.600 m
A2
RY+234
RX−62
RX−64
RD04
L=137.200 m
RD03 は L=137.600 m
0
1 : 50
2m

第 44 図　土坑 (2)



第 45 図　RG01～03 溝



第 46 図　RD16, 18 土坑及び遺構外出土遺物

Ⅳ 総　　括

1 遺構についての考察

竪穴建物跡と掘立柱建物

RE01 竪穴建物跡は西壁部分が未確認であるが，推定される規模は東西約 8.27 m，南北 5.6 m の隅丸長方形のプランで，中央に地床炉を持ち，6 本の主柱穴で屋根を支えている。柱穴のうち東妻の 2 本は東壁に接しており，柱と竪穴の壁との位置関係から屋根は東側が切妻であり，西側は寄棟であったと推定できる。東壁や南壁沿いに小形の柱穴が配されているが，浅い穴であることから壁の崩落を防止する程度のものであろう。したがって屋根の軒下に腰壁は無く，軒は葺きおろしであったと考えられる。西側を寄棟としたのは，この地方の冬から早春にかけて吹き荒れる強い西風に対応したものであろうか。竪穴建物は 1 期の後一度貼床されて 2 期に変遷しているが，その際に南壁の西よりに出入口状の張り出しが設けられている。この張り出しに上部を削平された RD19 の埋土は貼床の E 層に近似していることから，この土坑は 2 期の貼床に伴い埋め戻されたらしい。竪穴建物の主柱穴は南西隅の P4 は確認時の状況から 2 期にも継続していたらしく，主柱穴 6 本に明確な重複が無く，6 本の主柱はそのまま 2 期へと継続したと推定できる。中央の炉 1 は 2 期にも継続されて使用されているらしいが，炉 2～5 は貼床に覆われており継続しない。1 期の床面には切先の曲がった鉄製刀子のほか刀子や鉄鏃の残欠があり，B2 層からは鉄滓が出土している。さらに柱穴の柱痕跡には軸の折れた鉄製紡錘車が入っていた。このことから 1 期の竪穴内部では欠損した鉄製品など鉄素材として集め，製品を再生するような小鍛冶作業が行われていた可能性がある。炉 2～炉 5 は小鍛冶作業に関連する炉であるのかも知れない。2 期の竪穴建物には炉 1 の南側貼床の上から轆轤穴が掘り込まれている。貼床 E 層は灰白色の粘土が多く含まれており，均一の厚さではなく，竪穴中央部や東壁近くでは薄く，南壁近くでは厚くなり，2 層～3 層盛られている。このことから 1 期のある段階から竪穴の南壁近くに粘土や配合土が集積されており，E 層はその一部を使用して貼床されたものらしい。この際に轆轤の設置と南側張り出しが設けられたのである。張り出し部分が出入口であるとすれば，入り口を入って右側に轆轤が設置されており，土器制作の工人は炉 1 の暖房と明かりを頼りに作業することができた。1 期の竪穴建物内部で小鍛冶作業が行われていたとすれば，1 期のある段階からは小鍛冶作業と粘土等の集積場所を兼ねていた可能性がある。屋内に集積すれば，粘土や配合土の乾燥を防ぎやすいからであろう。竪穴建物は 1 期の鍛冶工房から 2 期には土器制作工房へと機能が変化したことになる。その後 2 期の終焉にあたり，轆轤が撤去されてその跡には 20 個体ほどの土師器の坏が集められ，埋納されていた。土師器製作工房を閉じる儀礼行為であろう。建物上部を支えた主柱穴には抜き取り痕跡が無いことから見れば，柱は地上部分のみ切断して屋根を撤去したと考えられる。その後土器制作の工房は遺跡内のどこかへ移り，この竪穴建物跡の窪みは RD20 土器焼成土坑（窯）へと変貌し，ここで大量の土師器を焼成したのである。焼成による焼土の形成は主に竪穴西壁付近に多く形成され，他の部分では疎らであった。残された製品や破片は全体から出土しているが，炉 1 に重なる土器溜りには径 2.5 m の範囲に隙間なく土器破片が集積されていた。炉 1 の上面には灰の堆積が残存し，土器溜りや RD20 土器焼成土坑の埋土中に炭化物の混入は認められたが，後述する RD02 焼成土坑のような灰の堆積は確認されなかった。伏焼きの灰が除去され，製品の土器を取り出した後に，製品化に失敗した土器を集積したのが，RD20 土器焼成土坑の土器溜りであったと考えたい。

竪穴建物や土器焼成土坑の東方には掘立柱建物が 4 棟確認されている。小形の柱穴で構成されており，それも廂や下屋は伴わない，側柱で構成された簡素な建物である。竪穴建物と棟方向の一致する建物や柱列は存在せず，両者の間には時

期差があるのかも知れないが，柱穴やその周囲からも土師器小皿や坏の破片が出土しており，土器焼成土坑などと関連する建物の可能性がある。

土器焼成土坑と土取り土坑

前述のRD20土器焼成土坑のほか，RD02，RD14は土器焼成土坑であり，近くのRD13もその可能性をもっている。径1.2 m から 2.1 m の円形に掘くぼめて底は概ね平坦に造った浅い土坑で，内部には焼成した土器の残りや破片，炭化物，灰などの堆積や焼土の形成が見られる。RD02土器焼成土坑は埋土中位のC1層～C2層に厚い灰の堆積があり，その上に小皿が正位で重ねられたり伏せて置かれていた。RD14土器焼成土坑は小ぶりの遺構であるが，A2層は灰が多く混入し，底面には炭化物の拡がりと焼土とともに小皿が伏せられていた。RD02土器焼成土坑C1層からC2層の灰層は，焼成時製品の上に藁などの燃料をのせ，更に灰を被せた伏せ焼きであったことを示す。この畔跡に残された灰層上面に土師器小皿が4個体伏せられていたのは，焼成して製品を取り出した後に再び灰を被せて上面に遺したと考えられることから，焼成土坑を閉じる際の儀礼行為と推定できよう。RD13土坑には焼土や灰の堆積はなかったが，土坑の規模はRD02土器焼成土坑に近似しており，土師器の坏や高台付坏，小皿がまとまって出土している。焼土や灰，炭化物などは焼成後に除去されたものか，あるいは激しい撹乱によって失われた可能性が高い。

一方，RD12，RD15，RD16，RD17，RD18については地山のⅢ層からⅣ層まで掘り込んでいることや，穴の底面に凹凸のある形態で，掘削後RD12土坑は全て埋め戻され，RD15，RD16，RD17，RD18は放置された自然堆積のあり方からみて，地山の土を採取するための土坑と考えられる。RD16とRD18からはRE01竪穴建物跡のほかRD02，14，20と同質の土器が出土していることからも，同じ時代に掘削された土坑である。掘削は良質な灰白色粘土には到達していないが，粘土と配合する土としてⅢ層からⅣ層を求めた可能性が高い。RD16の掘削方法はⅢ層より下のⅣ層を狙っていることは確実であり，黄灰色や灰黄色のⅣ層，あるいは黄褐色土のⅢ層から黄灰色土のⅣ層に移行する中間層の土を得るのが目的であったと考えられる。

2　遺物についての考察

出土遺物には平安時代の土器，鉄製品，石製品，土製品があり，他に縄文時代の土器と石器，近世以後の陶磁器，鉄製品，銅製品がある。最も多いのは平安時代11世紀に係る土器類で，調査区全体では遺物台帳登録番号で3457点出土している。このうち須恵器はRE01竪穴建物跡から須恵器大甕の体部破片3点のみであり，他は全て酸化炎焼成の土師器であった。遺構ごとの出土量はRE01竪穴建物跡（RD20土器焼成土坑）から1845点，RD02土器焼成土坑から315点，RD13土坑から43点，RD14土器焼成土坑から69点，RD16土坑から45点，RD17土坑から4点，RD18土坑から3点，遺物包含層（Ⅱ層）から6点，遺構検出面から表土，撹乱から1127点の土器類が出土している。平安時代の鉄製品はRE01竪穴建物跡から17点，RD02から1点が出土している。RE01から土製品は2点，石製品は3点，石器は2点出土している。また縄文時代遺物はRD08土坑，RG01溝の周辺から縄文時代中期の深鉢形土器破片9点，RD16土坑から磨製石斧が1点出土した。RG02溝からは18世紀以後の肥前染付皿の破片3点が出土している。

11世紀の土器様相

竪穴建物跡，土器焼成土坑，土坑から出土した土器のうち，そのほとんどは酸化炎焼成の土師器である。器種は坏，高台付坏，小皿，高台付皿，鉢，小形器台，甕がある。このうち甕は粘土の輪積みまたは巻き上げ技法で整形され，ロクロを用いずに作られている。坏や高台付坏，小皿，高台付皿，鉢，小形器台は，ほとんどは右回転のロクロ成形と糸切りで

作られ，手捏ねのものは小皿の一部に見られるのみである。

坏は，ロクロ水挽き回転糸切り無調整の坏も1点存在するが，ほとんどの坏はロクロ回転糸切り後外面無調整で，内面は水挽き痕が残らぬよう平滑に調整している。この工具についてははっきりしないが，布か弾力性のある皮革類を使用している可能性がある。村田見一は「土器制作時のロクロ回転させた際に外面を指で押さえ，内面にコテ状工具をあてがい，最後に口縁部を布か革などで仕上げた結果」（村田 1995）としている。小皿も坏と同様の整形，調整方法である。

内面黒色処理または内外黒色処理の高台付坏の底部は台状の厚い底部をもち，体部から口縁部にかけて内湾する。黒色処理の箇所は丁寧にヘラミガキされている。これは坏の底部をコースター状の粘土板にのせてロクロ成形し粘土板ごと糸切りで切り離した後，土器を逆さまにして底部から粘土板の外周に粘土紐を巻き付けて高台をわずかに突出させる。その後轆轤回転により高台の内法を刷毛のようなもので調整し高台と底部粘土板との接合部を整えている。以上の工程により高台付坏の底部は厚底となるが，高台内法のロクロ回転刷毛調整によって高台と見込みの落差がなくなり，高台がほとんど目立たなくなる場合もある。

高台付坏のなかには，坏部が内湾する形状のと，坏部が直線的に外傾する器形がある。外傾する器形は坏部分の器高が低く，坏と皿の中間的形態である。底部はやや厚く高台部分は底部の周囲に貼り付けられるが，ヘラミガキ黒色処理の高台付坏の高台よりも高さがあり，下端部はシャープな形状である。またこれとは別にかなり大ぶりな坏，または皿か盤，あるいは鉢のような器形に付された高台は，底部外周に粘土紐をまわしてより高く高台を作っている。その端部は厚く丸みを帯びており，高台外面に段をもつものも認められる。

小皿にはロクロの坏と同じ製作技法で作られるものがほとんどであるが，一部の小皿には手捏ねのものや，ロクロ成形切り離し後に，わざわざ指頭で圧して器面に凹凸を生じさせたものが1点確認されている（第22図364）。ロクロ小皿の多くは体部が内湾ぎみに外傾している。口唇部が幾分外反するものや，口唇部下に緩く線を入れて外反らしく見せるもの。内湾したままのもの，直斜状に外傾するものなどがある。

小形器台には柱状高台と輪高台がある。柱状高台は破片でのみ確認される（27図489）。輪高台は皿の底部外周に高い高台を付したもの（18図233～235及び24図399）で，高台の付しかたは坏部直斜状の高台付坏の高台に酷似している。

甕は全て粘土紐の輪積みあるいは巻き上げ技法で作られ，底部外面に木葉痕のあるものも認められる。ロクロを用いずに整形し，体部外面をヘラケズリや刷毛目で調整。内面をナデで調整する。口縁部は短く外反し，体部から底部にかけてすぼまった形状である。特異な例として，体部内外を指頭圧で凹凸にし，口縁部を指の爪をたてつつ捻り出した小形甕（第35図208，210）がある。

赤袋遺跡土器群の年代

岩手県内では安倍氏の拠点鳥海柵跡（金ケ崎町：国指定史跡）出土土器の存在や，岩手町沼崎遺跡から出土した土器が当該時期の土器として認識され，注目されてきた。近年では滝沢市大釜の大釜館遺跡や八幡館山遺跡にも同様の土器群が確認され，盛岡市内の大新町遺跡や小屋塚遺跡，宿田遺跡，上堂頭遺跡，高松神社裏遺跡，西黒石野遺跡などの出土遺物にも近い時期の資料が確認されて，これらも10世紀末から11世紀までの年代観が示されるようになった。一方鳥海柵跡では，地元金ケ崎町教育委員会によって国史跡指定に向けて内容確認調査が進められ，これに併せて過去の発掘調査成果の再整理が行われ，2013年5月に発掘調査報告書が刊行されている（金ケ崎町教育委員会 2015）。浅利英克はこの報告書の考察で，鳥海柵跡出土資料をⅠ群（8世紀以前），Ⅱ群（9世紀初め～10世紀後半），Ⅲ群（10世紀末～11世紀末），Ⅳ群（11世紀末～12世紀後半）に分類し編年を試みた。この中でⅢ群とした土器群は鳥海柵が機能した時代のものであり，遺構の新旧関係からⅢ-1群とⅢ-2群に分類し，Ⅲ-1にもⅢ-2にも細分不可能である資料をⅢ期とした。Ⅲ-1群は小皿，坏，高台付坏，内黒高台付坏で構成されるが，坏が主体で小皿や高台付坏，内黒高台付坏は少なく，若干の須恵器

甕が伴う。土師器坏は器高が低く，底部が台状になるものが多い。土師器の高台付坏は器高が低めで高台は円盤状か柱状，または断面三角形の高台となる。小皿はまだ坏よりも少なく，底部は台状とならず平坦で体部から口縁部はやや内湾する。年代は胆沢城終末の10世紀末よりも新しく11世紀前半としている。同時期の資料として長者原廃寺跡SX051土坑第2層、国見山廃寺跡SB001礎石建物跡，跡呂井遺跡，河崎柵擬定地遺跡。植田前遺跡第2号溝状遺構，多賀城政庁跡SK078土坑，大島井山遺跡6SK428土坑などが挙げられている。

Ⅲ-2群は土師器内黒高台付坏がなくなり，土師器の坏と小皿主体となる。土師器坏はⅢ-1群と比較して底部が台状となるものが少なくなりやや器高が高くなる。小皿の底部は台状を成すものと台状にはならないものが混在する。Ⅲ-2群はⅢ-1群に比べ，内黒土師器高台付坏の出土量がごく僅かであり，Ⅱ群から継続する土師器坏，高台付坏，内黒土師器高台付坏の器種構成が見られなくなる一方，小皿が多くなり，土師器の小皿と坏による大小の器種構成が明確化される時期と考えられるとし，この群の年代観は11世紀中頃としている。この時期の比較資料として，蛇塚遺跡SX1竪穴遺構，大釜館遺跡7号，9号溝跡，八幡館山遺跡，沼崎遺跡，多賀城跡第82次SK3027土坑，同SE1066井戸跡，台拠館跡S101，大島井山遺跡3S01，02，3SF102，同4SD103，同7SD30などの資料が挙げられている。以上が鳥海柵跡の土器様相である。赤堀遺跡出土土器は，鳥海柵跡Ⅲ-1群，Ⅲ-2群のうち，Ⅲ-2群に近い様相であるが，土師器のヘラミガキで内面黒色処理または内外黒色処理の高台付坏については，鳥海柵跡ではⅢ-2群では激減している。これに対し当遺跡では内黒または内外黒色処理の高台付坏は，RE01竪穴建物跡や土器焼成土坑全ての遺構で一定量の出土が確認され，Ⅲ-2群と同時期とされる滝沢市大釜館遺跡でも当遺跡と酷似する内面黒色処理の高台付坏が共伴している。岩手郡や北の棟部地方では，平安時代の後期の遺跡では甕類や内面または内外黒色処理の坏や高台付坏が多く出土する反面，ロクロ水挽きの坏類が極端に少ないと言う特徴があり，岩手郡の地域色の現れた土器様相と考えられる。

赤堀遺跡の周辺では，北西側の境橋遺跡，南方の稲荷町遺跡，南東の大館町遺跡，大新町遺跡，小屋塚遺跡，宿田遺跡，北東の上堂頭遺跡から，赤堀遺跡と同時期か，やや先行する年代の土器が確認されている。このうち稲荷町遺跡では2016年4月11日，開発計画により盛岡市教育委員会が遺跡北西部の試掘調査を実施したところ，平安時後期の竪穴建物跡3棟や柱穴，溝などが確認され，竪穴建物跡の1棟からは赤堀遺跡の内面黒色処理の土師器高台付坏と同質の土師器破片が出土した。この遺跡は12世紀後半の居館と推定されてきた（室野1994）が，11世紀中頃の遺構遺物の存在が明らかになった。大新町遺跡と小屋塚遺跡では，これまでに竪穴建物跡や掘立柱建物など平安時代後期の遺構遺物が確認されている。大新町遺跡1982年度の発掘調査ではRE701竪穴から土師器のヘラミガキ黒色処理の高台付坏，ロクロ坏，ロクロ小形坏，ロクロ小皿が出土。RD702土坑からは内面ヘラミガキ黒色処理の坏と高台付坏，ロクロ小皿が出土している。RE701竪穴では小形ロクロ坏が伴い，やや高い高台の内外ヘラミガキ黒色処理の高台付坏が多く出土しており，10世紀後半～11世紀前葉の土器に近い様相が窺える。RD702土坑出土の土器群には小形のロクロ坏はなく，小皿は口唇部が幽分外反する器形のものが3点，体部の中程から口縁部へ直斜状に立ち上がるものが1点出土している。また共伴した土師器内面ヘラミガキ黒色処理の高台付坏は，RE701竪穴出土の土器に比べて体部下半の内湾する形状が緩やかで，口縁部もRE701の高台付坏の口縁部よりも幽分強く反り返る。また底部は厚く作られて粘土板貼り付けている可能性が高く，ロクロから切り離した後に底部粘土板外周に低く高台を貼り付けたものである。RD702土坑の土器群は，土師器のロクロ坏は出土していないものの，土師器の内面黒色処理の土器や小皿においては，赤堀遺跡の出土土器群と酷似した資料であるといえよう。

以上の検討結果から赤堀遺跡の土器群の年代は，鳥海柵跡Ⅲ-2群，大釜館遺跡7号，9号溝，大新町遺跡RD702土坑と同時期である可能性が高く，概ね11世紀中葉に比定するのが妥当であろう。したがって大新町遺跡RE701竪穴，小屋塚遺跡RA8714竪穴建物跡などの出土資料は土器の特徴から赤堀遺跡よりも古く位置づけられ，10世紀末から11世紀前葉を中心とした時期となるだろうか。そのように見てくると，厨川では奈良時代から平安時代中頃まで，大館町，

大新町，小屋塚，里館遺跡などに集落が営まれていたが，10 世紀の後半頃から人が多く集まりはじめ，11 世紀には赤堀遺跡の近くに，安倍氏の統治拠点が設けられるに至った。さらに 11 世紀中頃には安倍氏の厨川欄と堰戸欄が営まれたが，前九年合戦終結によって安倍氏と共に滅亡に至ったと考えられる。

3　まとめと課題

赤堀遺跡は縄文時代中期頃に狩猟の場であったが，その後長い間人間の生活痕跡は途絶えていた。それが平安時代後期の 10 世紀末ごろからにわかに活況を見せた。当時奥六郡北端の岩手郡は，鎮守府胆沢城在庁官人の筆頭安倍頼時（頼良）の支配が及んでおり，この盛岡市厨川のどこかに厨川欄と堰戸欄が置かれていたと考えられてきた。赤堀遺跡は 11 世紀中葉を中心とした土器生産遺跡であり，安倍氏が滅んだ前九年合戦と重なる時代である。調査区の西端にあった竪穴建物は，鍛冶工房から土器の制作工房へと変化し，竪穴建物廃絶後（あるいは廃止後）まもなく竪穴は土器焼成土坑（土器窯）へと変化した。周辺からは簡素な掘立柱建物跡のほか，土器焼成土坑，土取りの土坑などが複数確認されており，政治的な儀礼行為や宴会のための土器がこの場所で大量に生産されて，安倍氏の館や柵に供給されていたのであろう。この土器生産施設の規模や範囲はまだ明らかではないが，南側畑地には 11 世紀土器の散布が認められており，周辺部に拡がりを持つことは確実である。今回の調査区では径 2 m 前後の土器焼成土坑と，竪穴建物を活用した大規模な焼成土坑が存在していた。竪穴建物は当初小鍛冶等の工房であり，ある時期からは粘土や配合土の集積場所でもあった。それが土器整形の工房に変化し，廃絶後は大規模な土器焼成土坑へと変化した。竪穴は小鍛冶工房から土器整形工房のころは，径 1.2 m～2.1 m の土器焼成土坑での焼成と考えられ，その後大規模な焼成土坑が必要になったのである。こうした背景には土器の供給先である安倍氏の拠点施設の大幅な整備拡充があったことが推定できる。おそらくは赤堀遺跡の東側あたりから大館町，大新町，小屋塚などの遺跡にかけての地域から，この時期の安倍氏の柵が存在したのではなかろうか。その後稲荷町遺跡，大館町遺跡，里館遺跡に 12 世紀の手捏ねかわらけ，ロクロかわらけを使用した遺跡が確認されるようになるが，前九年合戦の後から 100 年近くの間この地域は，政治的な空白時代となっていたらしい。このようにみてくると，赤堀遺跡の土器生産の年代は概ね 11 世紀中葉であり，そのなかでも前九年合戦（1051 年～1062 年）終結を降らない時期と考えるのが穏当なところではないだろうか。この時代に安倍氏関係で儀礼行為の土器を大量に必要としたのは，康平 5 年（1062）に源頼義と清原武則の攻撃で陥落した厨川欄と堰戸欄であろうことは容易に推察できる。

厨川地域の遺跡の中で，10 世紀末から 11 世紀中葉の遺構遺物は，境橋遺跡（西青山三丁目），稲荷町遺跡（大館町，稲荷町），宿田遺跡（前九年一丁目），上堂頭遺跡（上堂四丁目）を四隅としたエリアで確認されている（第 47 図）。これまでの発掘調査結果を基に検討するならば，この遺跡分布範囲内に安倍氏の厨川欄，堰戸欄が存在したのはほぼ確実であろう。各遺跡は滝沢台地南部を囲むように分布しており，10 世紀末～11 世紀の遺構遺物が存在する大館町遺跡，大新町遺跡，小屋塚遺跡付近から北側にかけて，安倍氏の統治拠点が存在した可能性がある。またこの地域の東方，安倍館遺跡から館坂遺跡付近は北上川に望む崖であり，しかも南に突き出した地形であることから，地形的に柵などの防御拠点が置かれていた可能性がある。

安倍氏の拠点鳥海柵跡は，鳥海柵の時代の遺構群を古い段階をⅢ-1 群（期），新しい段階をⅢ-2 群（期）としている。柵の中心的機能を果たしたとされる四面廂建物（縦街道南，鳥海地区西側）のうち，Ⅲ-1 期の四面廂建物は，東の段丘崖から 170 m 離れた縦街道南地区の平坦部にあり，鍛冶工房や竪穴建物，櫓を備えた要害的曲輪は，四面廂建物から 400 m 南に離れて，沢を挟んだ二ノ宮後の孤立丘に立地する。格式高く公的性格の強い四面廂建物を中心とする官衙的性格のエリアと，安倍氏のプライベート空間であり防御性の高い要害施設が頸離を置いて存在したことになる。それがⅢ-2 期になると，原添下南東部に堀で囲まれる一郭が営まれ，この中に 2 間×5 間に四面廂建物と 2 間×7 間建物を中

心に竪穴建物等で構成される居館が出現することが判明している（金ヶ崎町教育委員会 2013，浅利英克 2018）。Ⅲ-2 期にはⅢ-1 期の二宮後地区の要害の曲輪も継続しており，鍛冶場や櫓が構えられている。さらに二ノ宮後と原添下の中間の鳥海地区には大形の空堀が構えられて，二ノ宮後から鳥海，さらに原添下南東部までの 3 つの地区を一体化する縄張で大きな柵が形成されたのである。原添下南東部には段丘先端をＬ字形の空堀で方形区画された一郭が構えられ，郭内には四面廂建物と 2 間×5 間建物各 1 棟，竪穴建物 3 棟が計画的に配置された居館が置かれている。この段階に至り，安倍氏の私的居館が防御施設を伴って，柵の内部に整備されたことになる。

鳥海柵のあり方を厨川地域に求めた場合，地形的に要害となる北上川沿いの安倍館，館坂遺跡付近には防御性の強い櫓戸柵。そこから約 900 m の距離を置いて，滝沢台地南辺の大館町，大新町，小屋塚遺跡以北の台地上に岩手郡統治拠点としての厨川柵という配置が想定できそうである。前述のとおり，堀に囲まれた稲荷町遺跡からも 11 世紀の土器が出土しており，厨川柵の周囲には櫓戸柵のほかにも防御拠点が複数存在した可能性がある。また大館町遺跡から大新町遺跡，小屋塚遺跡，里館遺跡の東部では，詳細な年代は不明確ながら段丘崖や台地の縁辺に添う溝や大溝が確認されており注意される（岩手県教育委員会 1979，盛岡市遺跡の学び館 2012，盛岡市教育委員会 1982，1983，1986，2008）。安倍館，館坂遺跡と比較して，さほどの要害性はない厨川柵の周囲に，防御のための大溝を廻らせた可能性もある。今後はこの大溝群の年代についてさらに明確にしていくことが重要である。安倍館遺跡，館坂遺跡ともに 11 世紀の明確な遺構遺物は未確認であり，その立証は今後の課題であるけれども，安倍館には中世後期に工藤氏の栗谷川城（厨川城）が構えられたことでもその要害性は明らかである。このあたりが周辺では最も要害の地形であることを念頭に置きながら遺跡の究明にあたる必要があるだろう。安倍氏の柵については胆沢郡金ケ崎町の鳥海柵跡が確定したほかは，依然として遺跡が確定していない。一関市川崎の河崎柵擬定地では 11 世紀，12 世紀の土器破片とともに，張山山麓から北上川の平地を遮断する二重の大溝が確認されており，発掘調査担当者の羽柴直人は交通遮断施設としての河崎柵を主張している（羽柴直人 2004，2011）。北上市黒沢尻の安倍館は黒沢尻柵の擬定地であるが，これまでの発掘調査では中世黒沢尻館の遺構遺物が確認されている（北上市教育委員会 1977，1983）。黒沢尻という柵の名称と現地の地形を考えた場合，黒沢川と北上川合流点南側の安倍館以外には，柵の所在を考えにくい。この場所は近代まで川湊の所在地であったことから，黒沢尻湊を確保する目的で柵が設置されたとすれば，康平 5 年（1062）の合戦時に川湊周辺の防御施設を急造していた可能性もある。柵の存続期間が短く，統治拠点としての恒久的な柵や館ではなかった場合には，考古学的には遺構，遺物とも脆弱である可能性もある。厨川柵，櫓戸柵がどのような規模をたどったのかは全く解らないが，特に櫓戸柵が戦時のみに使用された要害であった場合は，河崎柵や黒沢尻柵と同様に，柵の本体を考古学的に把握しにくい状況であるのかも知れない。安倍館遺跡，館坂遺跡で 11 世紀の明確な遺構と遺物が確認されなかったのは，中世城館による地形改変のほかにも，このような背景があるのかもしれない。今後は厨川柵，櫓戸柵推定地域での発掘調査には，これまで以上に注意を払いながら，柵の遺跡究明を念頭に置いた調査を進めなくてはならない。それと共に，赤堀遺跡の範囲内にどのような遺構遺物が眠がるのか今後の開発を注視しながら遺跡の実態究明を進めたい。

（室野秀文）

引用，参考文献

浅利英克　2018「平成 29 年度鳥海柵跡発掘調査概要」「平成 29 年度鳥海柵跡シンポジウム資料」金ヶ崎町教育委員会

井上雅孝　1996「岩手県における古代末期から中世初期の土器様相」「中世土器の基礎研究 XI」中世土器研究会

岩手県教育委員会　1979「厨川柵擬定地」「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書―Ⅲ―」岩手県教育委員会，日本国有鉄道

金ヶ崎町教育委員会 2013（岩手県金ヶ崎町文化財調査報告書第 70 集）『鳥海柵跡　平成 22 年・23 年度（第 18・19 次）発掘調査報告書』（浅利英克編）

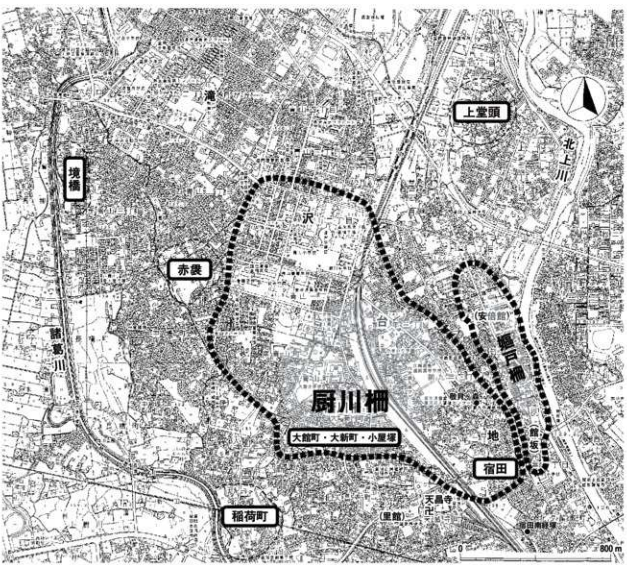
北上市教育委員会　1977　「川岸遺跡調査概報」

北上市教育委員会　1983　「川岸遺跡（1981・82 年度調査）」

久保田正寿　1997　「第 3 章第 2 節　土師器の焼成方法」「古代の土師器生産と焼成遺構」（窯跡研究会編），真陽社

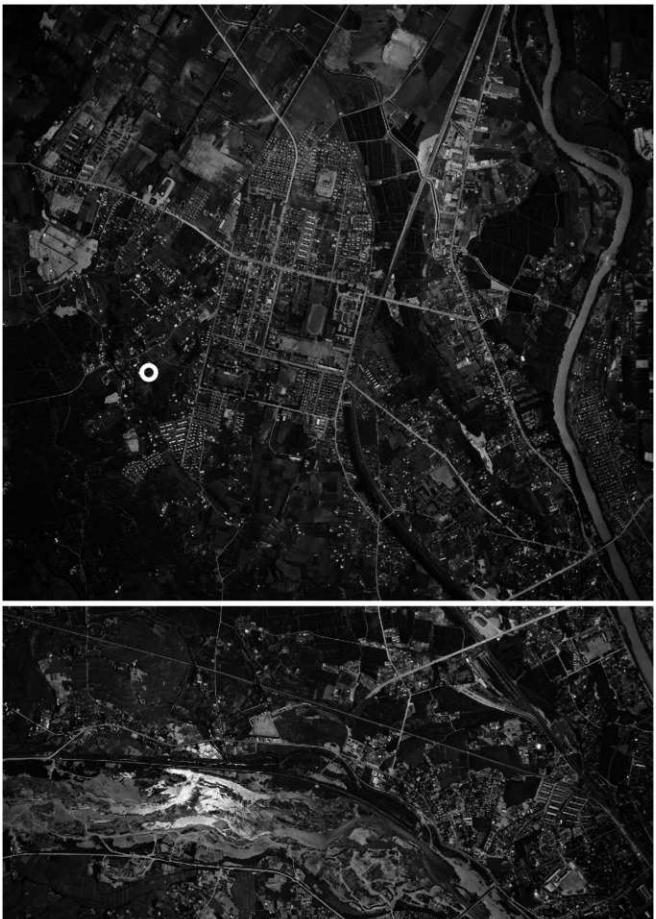
菅原祥夫　1997　「第 2 章第 9 節　東北東部―古代陸奥の土師器生産体制と土師器焼成坑―」「古代の土師器生産と焼成遺構」

（窯跡研究会編），真陽社
高橋昭治，八木光則　1994　「岩手町出土の古代末期の土器」『岩手考古学』第 6 号　岩手考古学会
滝沢村埋蔵文化財センター 2003 年 5 月（滝沢村埋蔵文化財センター調査報告書第 1 集）「大釜館遺跡発掘調査報告書―滝沢村区画整理事業遺跡発掘調査―」（吉田勢，井上雅孝編）滝沢村教育委員会
羽柴直人　2004　「安倍氏の柵の構造 - 交通遮断施設の視点から -」『平泉文化研究年報』第 4 号　岩手県教育委員会
羽柴直人　2005　「安倍氏の柵の構造 - 居館としての柵」『平泉文化研究年報』第 5 号　岩手県教育委員会
羽柴直人　2006　「安倍氏の柵から平泉の居館へ―柳之御所遺跡の堀の系譜―」『平泉文化研究年報』第 6 号　岩手県教育委員会
羽柴直人　2011　『東日本初期武家政権の考古学的研究―平泉勢力圏の位置づけを中心に―』総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻　平成 22 年度（2010）
村田晃一　1995　「宮城郡における 10 世紀前後の土器」『福島考古』第 36 号　福島県考古学会
室野秀文　1995　「厨川の中世初期居館―稲荷町遺跡の性格―」『岩手考古学』第 7 号　岩手考古学会
古川一明　2007　「多賀城跡の 11 世紀～12 世紀の土器について」『宮城県多賀城跡調査研究年報 2006 多賀城跡』（78 次）宮城県多賀城跡調査研究所
盛岡市遺跡の学び館　2012　『検証・厨川柵―古代末期のもりおか―』
盛岡市教育委員会　1982　「大館遺跡群大館町遺跡―昭和 56 年度発掘調査概報―」
盛岡市教育委員会　1983　「大館遺跡群大新町遺跡―昭和 57 年度発掘調査概報―」
盛岡市教育委員会　1986　「大館遺跡群大新町遺跡・大館町遺跡―昭和 60 年度発掘調査概報―」
盛岡市教育委員会　2008　『盛岡市内遺跡群―平成 18・19 年度発掘調査報告―』（大館町遺跡第 77 次・78 次ほか）



第 47 図　厨川柵，姫戸柵擬定地周辺

写　真　図　版



遺跡周辺空中写真（国土地理院 1965 年 6 月 12 日を一部加工して使用）

遺跡全景（南から）

遺跡全景（東から，背景は大釜方面）

第 4 次調査区全景

RE01 竪穴建物跡

第 3 次調査区全景

RD02 土器焼成土坑（南から）

RD02 土器焼成土坑（北西から）

RD02 土器焼成土坑（南から）

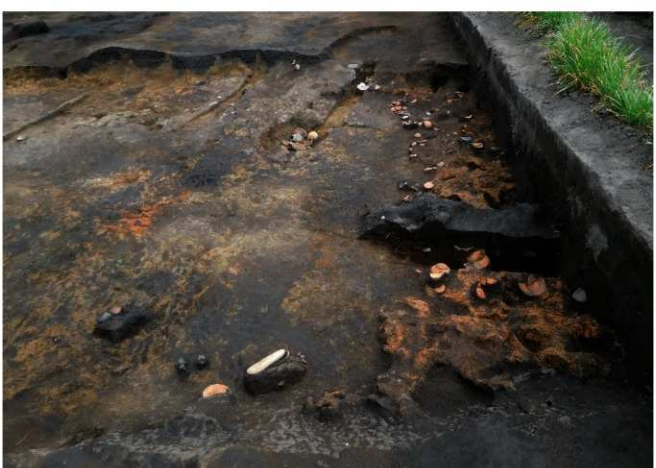
第 6 図版

RE01 竪穴建物跡（東から）

RE01 竪穴建物跡，RD20 土器焼成土坑土層断面

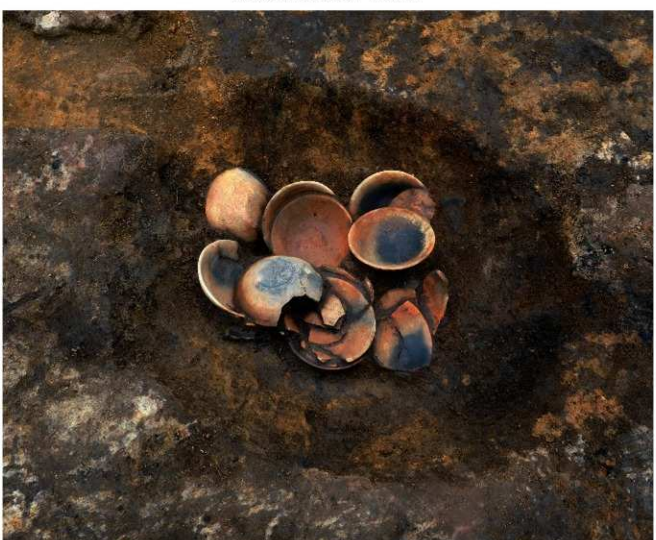
RD20 土器焼成土坑（RE01 竪穴建物跡上層）

RE01 竪穴建物跡 2 期床面（東から）



RE01 竪穴建物跡 2 期床面と西側焼土（C 層）と土器出土状況

轆轤穴上面確認状況（上が西）



轆轤穴上部土器埋納状況（東から）

轆轤穴の回転軸と詰め石（東から）

轆轤穴回転軸下部の状況（東から）

RD16 土坑（東から）

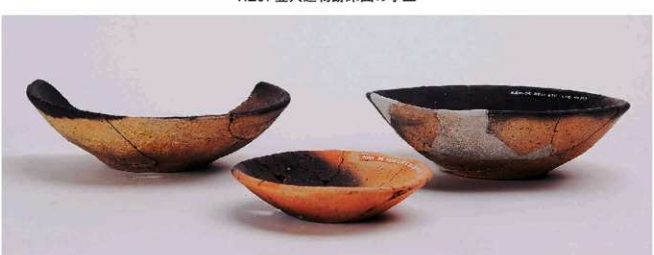
RD16 土坑土層断面

RE01 竪穴建物跡・RD20 土器焼成土坑調査風景

RE01 竪穴建物跡轆轤穴の精査

RE01 竪穴建物跡床面

RE01 竪穴建物跡床面の小皿



RE01 竪穴建物跡 E 層の坏と小皿

RE01 竪穴建物跡轆轤穴埋納土器群

RE01 竪穴建物跡轆轤穴埋納坏類

RE01 竪穴建物跡 D 層の小形器台

（第 11 図 8）

（第 11 図 7）

（第 11 図 8）

（第 11 図 7）

RE01 竪穴建物跡床面（第 11 図 8）

RE01 竪穴建物跡床面（第 11 図 7）

RE01 竪穴建物跡 E 層（第 14 図 118）

RE01 竪穴建物跡 E 層（第 12 図 50）

B2 層（第 22 図 380）

B2 層（第 20 図 281）

B2 層（第 22 図 380）

B2 層（第 20 図 281）

RE01 竪穴建物跡土器溜り（第 22 図 358）

RE01 竪穴建物跡土器溜り（第 22 図 355）

（第 22 図 358）

B3 層（第 22 図 382）

B3 層（第 24 図 394）

B3 層（第 22 図 382）

RD02

RD02

RD02

RD02

RD13（第 36 図 3）

RD02

RD13（第 36 図 1）

RD02

RD13（第 36 図 31）

RD13（第 36 図 7）

RD18（第 46 図 7, 6）

RD18（第 46 図 5）RD14（第 36 図 17）

RD18（第 46 図 7, 6）

RD18（第 46 図 5）RD14（第 36 図 17）

ミニチュア土器

ミニチュア土器

出土状況

賽子・碁石

鉄製品

鉄滓

有孔石

磨製石斧

報告書抄録

ふ り が な	へいせいにじゅうろくねんどにじゅうななねんどもりおかしないいせきぐん　あかほろいせき
書　　名	平成 26 年度・27 年度盛岡市内遺跡群　赤袰遺跡
副　書　名	―第 3 次・第 4 次発掘調査報告書―
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	室野秀文，今松佑太，神原雄一郎，鈴木俊輝
編 集 機 関	盛岡市遺跡の学び館
所　在　地	〒020-0866　岩手県盛岡市本宮字荒屋 13 番地 1　TEL 019-635-6600
発 行 機 関	盛岡市教育委員会
発 行 年 月 日	2018 年 3 月 28 日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
		市町村	遺跡番号	世界測地系				
赤袰遺跡（あかほろいせき）	岩手県盛岡市（いわてけんもりおかし）西青山（にしあおやまいちょうめ）一丁目（いちちょうめ）21 番，16 番（ばん）2	03201	LE05-0397	39°42′21.07″	141°6′23.67″	3 次 2014.10.14～12.25 4 次 2015.5.11～6.30	1,088	個人住宅及び農作業小屋の新築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
赤袰遺跡 第 3 次・第 4 次発掘調査	狩猟	縄文時代	陥し穴，土坑	縄文土器破片，石器	土師器生産遺跡
	土師器生産遺跡	平安時代後期	竪穴建物跡 1（轆轤穴），掘立柱建物跡 4，掘立柱列跡 2，柱穴 82，土器焼成土坑 4，土取り土坑 5，遺物包含層 1	土師器坏，小皿，高台付坏，甕，鉢，須恵器破片，刀子，紡錘車，鉄鏃，鉄滓，賽子，碁石	
	集落	近世以後	土坑 3，溝 3	肥前染付碗破片，鏈	

要　　約	竪穴建物跡は鍛冶工房から土師器生産工房へと変遷し，廃絶後土師器焼成土坑へと変貌している。周囲には土器焼成土坑や土取り土坑，掘立柱建物が存在する。出土土器は儀礼行為に供されるもので，安倍氏の拠点厨川柵，嫗戸柵などに供給したと考えられる。厨川柵・嫗戸柵が近くに存在することを裏付ける調査成果である。

平成 26 年度・27 年度盛岡市内遺跡群

赤　袰　遺　跡

―第 3 次・第 4 次発掘調査報告書―

平成 30 年（2018）3 月 28 日

盛岡市教育委員会

編集　盛岡市遺跡の学び館
〒020-0866　盛岡市本宮字荒屋 13 番地 1

印刷　山口北州印刷株式会社
〒020-0184　盛岡市青山 4 丁目 10-5